

明治三十五年六月二十三日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第參拾貳號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第叁拾貳號目次

論 說

歌人としての和泉式部(承前) 八波 則吉
 道義の進歩に就きて(承前) 森内 政昌
 校風論 清 董 生
 學生の本領 冠木 劍 狂

雜 錄

讀史雜話 浦井 恒堂
 Reform of English spelling E. Snodgrass

文 苑

さまよひし一夜 聽 水 子
 月下犀水の畔 月 聲
 李德裕論 村上 函 峰
 孟嘗君論 微子 學 人
 太公垂釣圖贊 嶺 南
 竹筒瓶銘 同 人

硯 銘 同 人
 筆 管 銘 同 人
 管 敬 仲 贊 同 人
 日本刀記 冠木堂主人
 雪 兔 紫 影
 和 歌 俳 句

雜 報

校長交替、送別會に就て、再ひ禁酒令に就て、
 星の夜半、道友會と福音會、少數の團結、夏期
 休業來れり、歸省諸卿に托す、愚者と一掃せむ、
 良心ありや、無題錄、午言三則、紀念日茶話會
 記事、演說討論部報告、獨乙語學部報告、端艇
 競漕會

寮 報

時習寮春季大茶話會記

附 錄

明治三十四年中増加書目

北辰會雜誌第三十二號

論 說

●●●●● 歌人としての和泉式部(承前)

●●●●● 第三節 雜の歌(つなき)

第三 境遇と哀傷

うく論ト來れば和泉式部は翻々たる一才女にして、近時のいはゆる女ハイカラの如く聞ゆれども、
 諺に「強く見えても流石は女」といふ事あり、もし彼女が願へる如く

ねしなべて春を櫻にあしはてゝ、散るてふ事のちからましかば
 人は何時までも浮氣にあるべし。然れども白駒勿々、絶世の色もうつろへば、尾花が末のあなめ
 く、小野とは云はぬが世の常なり。熊本の名妓檜垣姫さす、頭の髪は白川れみつわくむまでな
 り果てつ、あはれ健氣の清少も女流の性は免れ難くて

月見れば老いぬる身ぶを悲しけれ、遂には山の端にや隠れむ

と啣てり。況して式部は、前の傳記に見ゆる如く早く其夫道貞に別れき。當時彼女は芳紀妙齡
 ふして姿色おは盛んかりしかば、赤染衛門か忠告を一言の下に退け直ちに去つて親王の寵を專に
 せしとはいへ、豈に顧みて心中一点の疚しき所なしとせんや。見よ道貞はいよく陸奥の守とな

八 波 則 吉

りて京地を辭せんとする時、衛門が再び

行く人も留るもいかが思ふらむ、別れて後の又の別れと

と云ひ遣りたるに

別れても同志都にありしかば、いそ此れ度の心地やはせし

と云へり。而して其の發程の期ますく近づき式部が良心の苛責は刻一刻に逼りぬ。

遂に堪へ得で

もろ共にたゞましものをみちのくの、衣の關をよそに聞く哉

と涙と共に予云ひ遣りける。げに微妙なるは人心の奥底なるものな。かくの如くにして遂に道真に生別し、既にして情人爲尊親王に死別を。由て浮世の浮世たる所以を解し半ヶ年餘を垂れ籠めてつくづく人世の無常を嘆せり。乃ち彼の、雪につけ梅につけ、雨の降る日風の吹く夜、或は紀念物を見、或は時鳥と聞き、續集所載の六十餘首いづれも真情より發せる泣きの涙にあふぬは無きなり。而して或時の如きは、思ひにえ堪へで尼とあらんかさまで煩悶したりき。されど如何せん當時亦ほ妙齡なりしを。故を以て如上哀傷れ和歌について、「晝しのぶ」「夕の眺め」「宵の思ひ」「夜半は寢覺」等合せて四十六首の戀歌は出てぬ。陌頭楊柳の枝既に春風に吹ある、解釋す春風無限の恨み、これ婦人なべての情か。時恰も親王の弟敦道親王使者を送りて慰め給ふ。事の様は彼女が日記の冒頭に詳かなり。曰く

夢よりもはかなく世の中を歎き佗びつゝ、明一暮す程に、はうあくて四月十餘日にもなりぬ

れバ木の下くらがり行く。端を眺むれば築土の上の草の青やかなるも人は殊に目とめぬと哀にながむる程に、近き透垣のもとに人のけはひれすれば……………

あゝ此人に由りて式部は偶々發し來りし悲的人世觀を破られて再び洋々たる春に復れり。惜しむべし之が爲めに遂に彼の日記とありて「すきもの」の名をさへ残すに至れり。然れどもこれ將た一時の春ありき。帥の宮また濫焉として長逝し玉ふ。豈に驚き且つ悲しまざるを得んや。かの有名かる

かるもるき伏猪の床のいをやすみ、さこそ寢ざらぬのらざるがあ

は乃ちこの時の作あり。然れども當時なほ式部を慰むるものありき。否な、歌集に由て察するに宮の未だ薨じ玉はぬ以前よりして生來の多情は早くも既に他に其人を得たりしが如し。そは曾て述べたる武將藤原保昌にやある。氏は頼光四天王の一人なれば齊力の程は云はずもがな。横笛を弄して巨盜袴垂を心服せしめし其の人なれば。武藝の外に文事に通じ、和歌は勅選集(後拾遺)にも見ゆる程也。されば式部は豫て此の人を愛せしと見え(俗間に小式部は保昌と早く通ぜし折の子なりとさへ云ふものあり)帥の宮に別るゝを、嚮に爲尊親王に別れし時の如くは泣きもせで、酒呑童子の棲みしてふ大江の山を踏み越えて生野の道のいと遠く丹後の國まで下りけり。その時上東門院との離別の歌

思ひ立つ空とそなけれ道もかく、霧たち渡る天の橋立

羈旅の歌

來し方を八重の白雲へだてつゝ、いと山路の遙なる哉
ありけりと佐野の舟橋見つるより、物うくなりぬ淀の渡りは

等例に由て眞率見るべきものあり、かくて丹後に着し其後少時は無事不暮しぬ。其時の事なり、
或日保昌狩せんとて獵具を装へて晩餐す。秋夜沈々たる前に鹿鳴の切々たるあり。妻の式部

ここわりや如何でか鹿の鳴かざらむ、今宵バのりの命と思は

潜然として涙を垂れぬ。保昌感下て翌朝の狩獵を廢したりきと。見るべし身漸く老境に臨み、時
日と経歴とは如何に多くれ博愛的同情の涙を彼の女に與へたるを。時に俄然、春眠忽ち四たび
破れぬ。夜來風雨の聲、花落つ知る多少、式部は落膽いくばくぞや

人知れず物思ふ事は習ひにき、花に別れぬ春いなければ

「花に別れぬ春しなければ」、あゝ式部が心中察すべきあり

よさの海の蛋のしわざと見しものを、さも我が焼くとたるゝ潮か奇

今は我身の上とあり、保昌の君と別れつゝ、群にはぐれ雁がねの、なくく都は立ち返り貴船
の宮に詣でしは「澤の螢もわが身よりあくがれ出づる玉とぞ」希代の歌も赤心より切なる思ひを
寄せければ、神も哀れと見給ひけむ、しはぶく聲して「かく山にたぎりて落る瀧の玉散るバ
りり物な思ひそ」と、尊き返歌もありしとや。昔は山上の憶良老身重病年を経て癒えず

晝はも、なげかひくふし、夜はも、いさつきあらし

寧ろ死なばと思ひしが

五月蠅なす、騒ぐ子供をうつては、死にはしらず、見つゝあれば、心は燃えぬ、……、
水沫をど、脆き命も拷繩の、千尋にモがと
願ひくふせり。子は三界の首枷ぞや。釋迦如來金口正説にいへらく、愛は子に過ぐるおし云々と
至極の大聖なほ且つ然り、況んや世間の凡夫をや

瓜はめは、子供おもほゆ、栗はめは、ましてしぬばの……、しろがねも、黄金も玉も何
せん、まされる寶子にかめやも

げにや式部は四たび戀して四たび失ひ、身は早や色も香も褪せて、「うき世を厭ひながら、
めくこと、八重の白雲踏み越えて、再び都へ歸りしも、たい小式部のあればかりけり。小式部内
侍母に似て容姿端麗、大二條關白の寵一方ならず、特に才學ありて母の留守中「大江山」の一首を
即吟し滿朝の士女を驚嘆せしめし以來、名聲はなほだ噴々たりき。燒野の雉子夜の鶴、あはれ片
輪の子を持てるに忘れ難きが人情あるを、あゝる目出度き子と置きて如何でか世を捨て身を隠
さむ

身の憂きは知るべきかぎり知りぬるを、おほ歎くゝる事や何事

これぞ正しく慈母の情なる。然るを天何ぞ無情ある！千代もと祈る人の子を——あゝ式部が老後
唯一の杖を——柱を——無慙にも彼女が手より奪はんとは！

つくく式部が歌集を見るに、花咲けば歌ひ、花散れば歌ひ、月照れば歌ひ、月曇れば歌ひ、物
を遣るにも、人を待つにも、凡そ日常百般の事、事ある毎に之を三十一字に連ねて、彼女が有せ

る無形の詩囊は絶ゆる時なく金枝玉葉を出したりしが如し。されば爲尊親王の薨ト玉ひし時は云ふも更なり、帥の宮の失せ玉ひし時にも、「忍びて語らへる人のわづらひて今宵はえ過ぐすま」と聞さし時」にも、一木幡僧都が家の焼けし時」にも、鹿の鳴くにも牛は死ぬにも、常に常に同情の和歌をものたりしあり。然るに何ぞや。獨り小式部内侍が斷末魔、僅に母の顔を見上げて

いかにせんいくべき方もかまはえず、親に先立つ道も知らぬば

と、息れ下より云ひし時、並に玉の緒遂に絶えし時、これを慰め若くは之を吊ふ和歌乃只一首だに見えざるは何ぞや。赤染衛門は曾て其子舉周が病に陥るや三首の和歌を住吉明神に奉りて、「代ふんと」さへ願ひしものを。予は幾度か式部が歌集を反覆通讀して遂に其一首をも得ざりしと以て大に怪しみ、果は式部が枝料をさへ少しく疑ふ所ありしが、既にして予は翻然悟りき。悟ると同時に泣然として涙下りき。夫れ「あはれ」といひ「悲し」と叫ぶ、實に哀れに悲しきものあるべし。然れども請ふ一考せよ、哀れの極悲しみの極に至らば、誰か又「あはれ」と云ひ「悲し」と叫ぶものあらんや。只々茫然自失せんれみ。諺に「言はぬは言ふにいやまざる」と云ひ若くは俚語に「泣かぬ螢が云々」といふもの、蓋し此の間の眞の消息を傳ふるものにあふざるか、思ふに當時式部が胸中既に苦悶煩悶の境を越えて殆んど泣く涙すなかりしなふんの。かれ「うるもろくさ臥猪の床の」といひ、或は「死ぬるにもまさりてものをうしとのみ」思ひし時其哀傷は、詮られば式部が最後の悲痛の十が一にも足らざりしなるべし。要するに予は、かゝる場合に於ける詩人歌人の沈黙を以て慥に無音の詩無聲の歌と稱して憚らざるもれあり。

かくて日を経るまゝに式部が心もかのづから我身にうへりて、茲に初めて悲歎の歌も現はれぬ。乃ち「今は仇なる」其子の紀念物に對して

諸共に苦の下には朽ちずして、埋もれぬ名を見るぞ悲しき

とよめり。細川幽齋は詠歌大概抄には此歌を以て哀傷の最も上乘なるものとなし、百人一首一夕話には挿畫さへ入れて盛んに之を賞賛せり。いはゆる「詞によせおき」所、實に式部が眞情を見るに足る。次に其子の狩衣を見て

置くこ見し露もありけりはのなくて、消えよ人何を何にたごへむ

雪のふる日

なごて君むなしき空に消えにけむ、沫雪だにもふればふる世に

また小式部内侍が忘れ形身の乳子を見て

ごめ置きて何を哀れと思ふらむ、子はまざるらむ子はまさりけり

以上いづれも諸書に引かれて、爾來いのに多く我國の歌人を感泣せしめたるよ。試に式部が經歷を知つて當時の切なる心事に至らば誰か一掬の涙なうらむ。儲その歌には何れに甲乙おけれども、「もろ共に」「置くと見し」「あごて君」の三首、稍々最後の一首に勝りたらんう。「子はまざるらむ子はまさりけり」とは了俊辨要抄に云へるが如く、迂餘婉曲よく、心をまはして讀めるおれども、哀傷の歌としては少く、意匠に過ぎたるなきか、予は寧ろ「むなしき空に消えにけむ」又は「消えにし人を何に譬へむ」の眞摯直截なるを愛す

佛教入りて三百年、平安朝に至つて其勢頗る隆盛なりき。當時の日記記録の類を見るに多少其の影響を受けざるはなく、謂ゆる「男も女も法華經を讀みし時代」あれば、縦し眞の意味に於ける佛教は解せざりしにもせよ、外面に顯はれたる形跡は甚だ大なるものあるなり。されば又其時代の和歌を檢するに、古今集以後は空蟬と云ひ朝露と云ひ盛に諸行の無常を歌へるものありて、後拾遺集以後には終に勅撰集に釋教一門をさへ加ふるに至れり。抑も我國の歌人にして最も早く人事社界に悲的觀察を與へて所謂印度の宗教思想を我が歌壇に導きたるは蓋し萬葉集の憶良なるべし。氏は生來多情の人、加ふるに再三再四不幸に會して頗る人世の無常を悟れり。故に其和歌に於ても専ら世間の住し難さを歎じ、貧窮の問答を寫し、熊凝み代りて自ら哀しむ等、家集全篇殆んど佛教趣味を帯びざるものなし。時は神龜天平の交なりき。爾來幾多れ道俗男女、われもくく無常を歌ひ寂靜を唱へぬ。然れども身はこれ現時平安ある樂境に衣食し、若くは心ならずも出家せるもの、いうでの眞の無常を觀し眞の寂靜を解し得べけん。かくの如く我聞く、昔時悉達太子は九重雲深き宮殿に生れ、圓滿充福の家庭に育ちながらも尙ほ且つ塵世の汚濁を感じて夜陰ひそりに出家せりき。是れ蓋し太子の太子たる所以にして萬世尊信せらるゝもの其の基因全くこゝにあるべし。實非非凡の大勇氣大決心あるにあらずんば、いうでか「面白き現世を忘れて底ひも知れぬ當來の事を希ふ」ものあらんや。宜なるのち釋尊滅して三千載、印度に於ても支那に於ても、將た又日本に於ても一人のこれに比すべき大道心大聖徳の出でざる。されば我國の出家と

いふも知るべきのみ。得度といふも察すべきのみ。況んや中古の俗人をや。況んや平安朝の歌人の如き俗の又俗あるものをや。見よ彼等が好んで法花の諸品を歌ひ維摩の諸喩をよめるもの、只その經文を開いて不消化なる文句の一二を翻譯したるに過ぎざるを。依て茲に項を設けて彼等が机上の無常説を聞くも殆んど徒勞に屬すべけれど、さりとて詠歌の多さが中には間々巧妙を極めて、實意は兎もあれ、單に和歌そのものとして二見するの價値なきにしもあらず。今一二の例を舉げんや

小野小町 世の中は夢か現とも、夢とも知らず有りて無ければ

檜垣姫 枯れぬべき草の末とも知らずして、露の命を何にかけしむ

紫式部 暮れぬ間の身をば思はで人の世れ、哀を知るすのつははりなき

赤染衛門 夢や夢うつゝや夢と分りぬ哉、いづれの世にの覺めむとすらむ

伊勢大輔 消え易き露乃命にくふふれば、げにとこほる松の雪かな

相 摸 淺茅原野分にあへる露よりも、おほ有り難き身をいかにせむ

等いづれも哀に物があし、されど露に比し夢に譬へて多くは千篇一律あり。和泉式部が無常の歌おも此種の例歌いと多く

草の上れ露にたとへし時だにモ、こは頼まれし幻の世か

頼むとて頼みけるこそ果敢なけれ、晝間の夢の世とは知らずや

其他「露より先に消えにけるのち」「たゞ宵の間の夢れ世に等、一々枚舉に違あらず。而して此の

如きは雷に平安朝のみならず、我國の文學を通じて無常を示すに缺くべからざる對象とされるものあり。これに次ぐは「空蟬」「飛鳥川の淵瀬」「朝顔の花」等にて式部も多く其例に倣へり。これ等は暫く略し、少く異色あるものを撰べば、

緒をよわみ絶えて亂るゝ玉よりも、ぬきとめ難し人の命は

夕暮は物ぞ悲しき鐘の音を、明日も聞くべき身とし知らねば

なご着想や、清新にして情も亦切實あるを覺ゆ。次に

りんどうの花とも人を見てし哉。風は前なる宵の燈火。漂ふ雲となんぞすらん。

風の前なる木の葉なりせば。露と花とれ中が世の中。

等、例の生硬ある漢文直譯的句調なれども、才筆縦横清楚遒勁、式部が和歌の特色として先づ以上の如きを推すべきあり、然り而して是等中には所謂作歌も多のるべけれど、憶良と同トく老後身自ら浮世の無常を感じ、頗る不幸に逢遇せる彼女が所詠は、之を博士の家に醸トて一子を擧げ一女を生み略ぼ圓滿和熟せる家庭の裡に一生を送りし赤染衛門が作歌に比すれば、その眞を寫し情に逼れる、豈に同日に談ずべけんや。北村季吟は其著百人一首拾穂抄に師説を引て、「和泉式部は殊に深く佛道に入りし人にて侍り」といへり。予を以て見れば「殊お深く」といへるも大凡は察するに足る程あれども、彼の性空上人に贈れる結縁の詞、並に彼女が辭世と稱する「水は水火はもとの火にゝへしけり云々」、其他日記歌集等に散見せる二三の点に由て考ふるに、當時片々たる女流れ中には比較的最も深く佛道に通トたりしや知るべきあり。況んや其傳を見るに、

式部は後には尼となりて餘命を誠心院に送りたりとあるをや (未完)

道義の進歩よつきて (承前)

森 内 政 昌

固より道徳の進歩と罪惡の増加との比例如何といふ問題は、快樂の増加と苦痛の増加との比例如何といふ問題と同じやうに、決して精確に立證せらるべからざる性質のものであつて、如何に統計學が進歩しても、到底最後の解決を得ることは六ヶしいであらうと思ふ、然しながら倫理的世界觀は、此二箇の問題に對する吾人の見解如何によりて、大なる變動を來たすを免れないやうにして、兎に角吾人の目下有する智識の範圍内だけに於ては、比較的精密なる研覈考量をなし、吾人の此問題に對する態度を一定して置く必要があるのである、若し夫れ苦痛増加の割合に快樂の増加が減少して行くことよければ、世の中は誠に樂みの少き、苦の多い「愁の谷」とでもいふべきものになるであらうし、若し道徳は日一日に沈淪し行きて、到底救濟せられぬものとしたらば、吾人々類は世の進歩と共に惡魔化して行くので、未來の此世界は惡魔と以て充たされたる世界であつて、「世界の燒失」でもなければ淨めらるゝことはなくなる譯である、以上二種の見解は共に厭世觀に屬するので、甲を名けて快樂上の厭世觀といへば、乙は道徳上の厭世觀とでもいふべきものである、此二箇の厭世觀の有名なる代表者は獨逸のショウメンハウエルと佛蘭西のルウソウとである、此二人は共に軌近の西歐に於ける思想界の二曉星ともいふべく、此二人によりてたしに一部の眞理は光明を得たのであるが、その觀察が餘りに社會の暗黒方面のみ集注せられ

た嫌ひがあるので、その所謂眞理も一部の眞理であつて、全体の眞理ではなき観がある、此の快樂は減退し道徳に衰頹するものなりといふ厭世思想は何れの國民であつても、智識が漸次萌芽し來つて、今や社會的組織的の生活に入らんとする時に發生したのである、基督教の傳説であつても、無辜と幸福の樂園時代は知識の木の実を食ふた時に失はれたとせられてあるのは、誠に味ふべき眞理を含んで居るのである、蓋し厭世の思想は智識の發達せる後に起り來つたのであつて、従つて無智の小兒どう、田畝を耕す外に仕事のない農夫とくは、嘗つて厭世の思想を夢みたる事もない、夫故に知るといふ事は憂苦の原因であるといふ事は幾多の詩人が謠ふて居るにである、ジャンイが「幸福は無智の境にありとせば、學ぶに勝る愚かな」(Where ignorance is bliss, 'Tis folly to be wise)といふて居るのも這般の消息を傳へて居るのである、吾人は先づその社會の文化の發達と共に、苦痛は増加して快樂は減退するものなりといふ説を評論して見やうと思ふ、シヨウベンハウエルの説く所によると、快樂上の厭世主義は二箇の根本原理の上に立つて居る、一は慾求の増加すること、二は可感性の強くすること即是である、第一に文化の發達につれて吾人の慾求の對象が益々増加して來る事は明かである、古への人民は最も簡單なる肉体的慾求の外、更に慾求を有して居るかつたのである、渠等れ慾求の大部分は品質の佳否に論なく、たゞ食ふといふ事とであつて、それ以外に錯雜なる慾求を有して居ない、丁度小兒の様に渠等は實に質朴なる生活に甘んじて居たれである、然るに文化れ發達するにつれて肉体的の慾求即ち衣食住などは好みも複雑になつて來るのみならず、又それ以外に精神的若しくは觀念的の慾求が生れて來る、學

問、美術、工藝等諸種の吾人を誘惑すべき對象は増加して來るのである、夫故に吾人は容易に「古代の人民は慾求が少かつた故に之を満足し得たけれども、今の人民は慾求が多いかゝして之を満足するものが容易でない」とこれ結論をなす事が出来る、然るに慾求を有して居つて之を満足させないのは苦痛であるといふ事は明なる道理である、夫故に文化の發達は吾人の苦痛を増加するといふのはシヨウベンハウエルの論旨である、此議論は勿論拒否をべうらざる道理であつて、吾人もしうく思ふのであるが、かゝる苦痛を逃るべき方法手段といふものも漸次發見せられ計畫せられて來たといふことを忘れてはならぬ、然らば夥多の慾求に對する濟治策は如何なる途によるのであるかといふと、蓋し二途ある、甲は積極的にその慾求を満足せしむる方法であつて、乙は消極的にその慾求そのものをなくする方法である、甲は客觀的方法であつて、乙は主觀的方法である、甲は吾人の智識に依憑するのであつて、吾人の有する智識は科學的研究の結果により諸種の理論を發見し、或は機械に、製造に、幾多の便利を吾人に與へ、吾人の得んと欲する所のものを去て容易に(經濟的に)いへば廉價に得せしむるのである、此点に於てはたしかに十九世紀は偉大なる恩恵を蒙つて居るのである、ペイコンの科學的研究法を唱道してより諸種れ方面に科學的研究が開始せられ、その結果が吾人の日常の生活問題の解釋に應用せられ來つた結果は、鉄道も出來、電信も出來、幾多の物質的便利と供給せられて、兎に角にも吾人は古代の人民よりも、より便利なる社會に生息し、より完備せる家屋に住し、より美はきき衣服を着し、より甘まき食物と味ふて居るのである、之を古代の土に穴して棲み、樹に巢くふて住し、野獸の肉に腹を肥や

して居つた人民に比すれば、明かに吾人は慾求の夥多あると同時に、又之を満足せしむべき方法と手段とを多く有して居ることが明かである、之れは全く輓近科學の蔭であつて、たゞ科學は此点に於て人生濟度の[○]大任務[○]を盡しつゝあるものである、然し如何に科學が進歩するも尙凡て吾人の有する慾求が満足され得べしとは考へ得られぬ、たゞ科學的智識は吾人に吾人の慾求を満足せしめ得べき手段と方法を與へつゝあるのであるけれども、それ手段その方法は物質的のものである、科學は物質的慾求を満足せしむべき方法と手段を物質的對象によつて與へつゝあるのである、而してその物質的對象を得るのには所謂「富」尙平たくいへば「貨幣」といふものが必要である、然るに貨幣は吾人々類には平等に分配されてなく、又分配されるべき性質のものであり、従つて「貧窮」といふことは如何なる社會學者も之を救匡することが出来んであらう、つまり「貧窮」といふことは「科學的恩惠の攝護に與ふれない」といふ意味である、されば科學の救濟は到底最後のものではないといふ事は明かである、こゝに於て吾人は乙の途に入りて、慾求そのものと滅却することを講せなければならぬ、中世以前にありて、未だ科學の開けあつた頃には、積極的に慾求を満足せしむる方法に缺くる所あつた故に、世の多くの人は慾求の滅却を以て苦痛を減ト大安樂を得べき途として記述した印度の婆羅門の聖者より中世の基督敎の僧侶に至るまで皆慾求の滅却を以て神の道に入る入門として居る、然るに近世に至りて科學の進歩が著しくあり、慾求は滅却せられずとも随分満足せらるべきものといふ考を生じ來りて、その結果として吾人十九世紀は全然慾求満足の唯一の舞臺と變じ、中世の昔し、山に入り、林を籠つて脩道しつゝあ

りし僧侶の事蹟を見て愚かりとして笑ふ様か世の中とあつて來た、然しかゝる十九世紀の思潮は決して完全な思潮ではない、一部の人は即富める人はそれで安心して居らふけれども、一部否むしる大部分の貧しき人が満足しなげな様にあつて來る、社會主義の勃起し來る所以は全くこれにある、夫故に目下吾人の宜しく學ぶべきことは、慾求を却けて而かも心裏の靜安を見出す方法である、此点に於て吾人は古く婆羅門の聖者の教へに待つ所なくてはならぬ、たゞかに慾求の滅却といふことは絶言語の妙樂を伴ふて來るので、此点に關して基督の教へた所は眞理である、基督の根本思想といふのも、「自己を拒否せよ」(Aparnasas' hōctanton) と云ふ二字以外に出でない「自己を拒否せよ」とは自己の有する凡ての慾求を棄てよといふことである、然しかから吾人モ吾人の有する凡ての慾求を棄て去つたから、その結果は吾人の滅亡ではあるか、明かに凡ての慾求を棄てよといふことは、正しく之を解釋すれば此の世の中の事物に對する慾求を少くして、その大部分の慾求の動力を變へて出世界的の對象に向はしめよといふ事である、決して全然その慾求を滅すべしといふのではない、吾人の有する慾求の動力がその方向を變へて、プラトンの所謂エロスの様に出世間的の方向に向ふといふと、その情力は一種の清淨化を受け、その清淨化せられたる情の收得する快樂は即妙樂即說樂である、夫故に涅槃といふことは決して死灰的に解釋すべきものではない、實に此種の救治法を教ふるのは即ち宗教の任務であつて、此方面の救治策が次第々に發達して、廿世紀以後は次第々に宗教的社會と化するであらうことは、吾人のコントの預言をいとも信じて疑はざる所である、以上敘述せる二途の救治方法により明かに苦痛

の増加は匡救せざる、途があるのであつて、決してシヨウペンハウエルの心配は入らぬのである、第二の可感性の強くあるといふシヨウペンハウエルの議論は下の様である、人間の智識が發達すればする程未來に對する思慮が深くなつてくる、極めて野蠻ありし古代の人民は猶小兒の如くに常に瞬時の中にのみ生活して、現在の苦痛より以外の苦痛を知らない、例へて見ると、その死する場合であつても、死の苦痛は經驗するであらふけれども、死の懼 (horror motifs) は經驗しない、然るに智識の開けた今の人は未だ死なない先から死といふ事につきて色々な苦勞をする、蓋し人間の智識の發達それはする程現在と未來に於ける諸種の關係が判かつて來る故に、現在の苦痛は申すに及ばず、未來に對して諸種の恐怖、疑懼及苦慮を有するやうになる、而るも此未來の恐怖疑懼苦慮の現在の苦痛よりもむしろ忍ぶべからざるものであるといふ事は、多くの心理學者によりて唱道せられて居る、實に此未來の憂苦そのものは人を狂にし人を自殺せしむる程強大なる勢力を有して居るので、憂鬱病者の死を以て自己に苦痛を逃る、唯一の途とあり、死といふ普通嫌惡さるべき觀念が快樂の情調を伴生するに至るのも、全く文明の結果として生下來れる現象であつて、古代にはかゝる病症はかつて發見せられなかつた、かゝる文明の弊はたしかに存在して居るので吾人はその結果として心身共に今日の文明を咒咀するやうになる、トルストイ、ニイチエといふやうな偉傑の聲は此世の繁雜忙多ま堪へない反動の聲として見ることが出来る、シヨウペンハウエルはかゝる思考を基礎として、文化の苦痛を増加するのを説いて居る、然しかから他に之を救治すべき方法はなき乎といふのでない、シヨウペンハウエルの説く如く現在未來の關係を

知るに至れる爲に、恐怖心の増加したることは事實である、又それと同時に希望心も發生したのである、現在未來の關係を知悉しない古代の人民には恐怖心かきと同時に希望心も亦あつた、然し吾人が人間の性質として智識の發達せればする程、むしろ懷疑に傾くのが故に希望心よりは恐怖心の方が生し易くなる、況してその希望する所にして達せられざれば尙一層の苦痛を感ずるのである、此種の議論はまことに六ヶしい、智識の發達は懷疑に傾くといふ事は正確なる事實らしい、希望は達せられない時には一層大なる苦痛を感ずる所謂落膽するといふ事は、之と反對に希望の達せられたる時には一層大なる快樂を感ずるといふ事によりて相償はるのである、本來希望といふことは「かくあれかし」といふ事で、半分は「かくあるべし」と信ずれども半分は「かく結果せざる事もあり」といふ疑懼の分子を含んで居る、夫故に半ば疑は「かりしことが實現せらるゝから大へんにうれしいのである、更に智識の發達の爲めには幸福なる一大領域がある、それは吾人の觀念の默想である、これには二つの種類がある、甲は記憶で、乙は冥想である、第一の記憶にありては實際快樂であつた實事は同じく楽しく感ずる、苦痛困難でありし事實ものへりて樂しき形に於て追想さるゝのである、例へて見れば蜀道ともいふべき嶮岨を旅行した事があつて、非常に困難した事ありとせん、後に至りて之を追想すれば反りて愉快なる觀念となつて現はれて來る、この心理的事實は如何なる理由を有するかは明らに分からぬか、多分障害 (hindrance) に打勝つたといふ觀念が快樂の情調を興ふるのであつたと信ずる、人生は猶行旅の如しといふ譯で、吾人が今まで經來れる快樂苦痛の歴史も、今より之を追想すれば、すべてたのしいのである、是れは吾人の智

識の發達に伴ふ一大利得であつて、羅典の諺にも「過去の記憶はすべて樂」(omnes memnisse jubile)といふ事が有る、第二の冥想といふことも、智識が發達した人において始めてあり得る心的作用である、冥想はしばらく吾人を現實界より離脱せしめて、觀念界に遊ばしむる作用である、讀書も此部類の快樂に屬すべく、想像の快樂も此種類に屬すべく、哲學的考察も此種類の快樂に屬する、此觀念界の生活は現實界の生活とは異なりて、快樂のみであつて苦痛はない、尤もその快樂は現實界の快樂とはその撰を異にして居るには相違ない、詩人とか哲學者とかはその半分若しくは大部分の生活は此觀念界に屬して居る、カントはある一定の書生のある一定レポタンを見なくては大學の講義が出來なかつたのである、如何にカントの冥想家であつたといふ事う分かる、吾人普通の人間であつても此冥想界に逃れて一時現實界の苦惱を離脱するのである、詩歌發句の作爲は即是である、演劇の傍觀も此種に屬する、這般の冥想は進歩すれば現在の我身を見るよと夢に我身を見ると同くなる、俗に「悟る」「あきらむる」といふ事は此心的作用の發表である、然るに古代の人間はあつる心的作用を有しなから、かゝる避難所を缺乏して居る、然るに智識の發達はかゝる巧妙なる心的作用を吾人に與ふるに至つたのである、更にシヨウペンハウエルは論じていふのに、獸類は自己以外の獸類の苦痛及死を悲むことを知らず、然るに人間には同情的可感性といふものがあつて、如何に未開れ蠻族であつても、その親、その子、その兄弟、その一族の苦痛と死とを苦痛に感するのである、此同情的可感性は智識が次第に發達して自己の世界に於ける位置關係の一層明らなるに至りて益々その強度を増すのである、夫故に智識の尤も發達せ

るものは、その家族、その民族、その國家のみに止まらず、人類全体に苦痛をも感ずるに至る、故に賢者常に憂色ありといふてある云々、勿論他人の苦痛によりて自己の苦痛の増加するは事實なれども、又人の快樂を同感するによりて自己の快樂も亦増加するのである、たゞにそれ止まらず、本來同感といふことは全体に於て寧ろ快樂を増加する傾向を持つて居る、他亦し苦痛は人々同感によりて減ぜらるゝに反し快樂は人の同感によりて増加するのである、夫故に獨逸の諺に「分たれし苦痛は半ばの苦痛、分たれし快樂は倍の快樂」(Getheilten Schmers ist halber Schmers, getheilte Freude ist doppelte Freude)といふ事がある、それで上來述べて來た所のものをつゞめて見ると、文化の進歩と共に苦痛の復多と強度との増加するものであるとするとシヨウペンハウエルの議論は、一方面に觀察に止まるのであつて、吾人は又之と同時に快樂の復多と強度とも増加することを否むことが出來ぬ、然らばその増加する苦痛と増加する快樂とは何れの超過するものでありやといふと、厭世家は苦痛の増加を説き、樂天家は快樂の増加を説くけれども、共に自己の感情より來れる議論であつて、何れも水掛論たるを免れぬ、つまり吾人は苦痛の方が増加することも快樂の方が増加することも何れも定めかねるので、到底正確なる計算は六ヶしらのうと思ふ、たゞ余輩の信する所のものをいはしめば、快樂の増加と苦痛れ増加とは均しいので、古代の人も今の人も貴さも賤しきもその有る快樂の度は平均して居るであらうと思ふ、勿論個人々々を取りて論ずれば快樂も多く享有する人と苦痛を多く享受する人とがあることは免れぬ、凡ての人が「ノルマル」なる身体の健全性を有し之を保持し得べきだけの生活材料を缺乏しな以上

は大体の人間は古今東西を問はずその一生の快樂苦痛の量は平均して居ると信ずるのである、此のことは情調の交互律リテライティより考へても、刺撃と情調との關係より考へても、近い眞理であると思ふ、此部分の心理的研究は中々確定せられぬのであつても若し此事實にして科學的正確性を得て來たと思ふれば、ベンサムの意味に於ける道德の進歩は望むべく出来ぬ、本來道德の進歩といふことはベンサムといふが如くに快樂の量の増加でもなく又活動の量の増加でもない、快樂の量活動の量といへば古今同一であらうと思ふ、されば道德の進歩といふことは活動の量の増加従つて快樂の量の増加ではなくて、活動の形式の進歩して行くことである、此意味により考へれば前々述べたるが如く道德の進歩するとは明くである、道德の形式活動の形式といふ点より立論すれば、今日の昔日に比して進歩せることは明々の事實であつて、道德の進歩といふことが此形式の進歩そのものにありとすれば、道德は日一日進歩して行くことは蔽ふべからざる事實である、夫故に往古にありて道德的意志力の顯現の大ありしは反へりてそれ社會全般に於ける道德の不振を意味するのである、之を個人の歴史によりて考へて見るに、自己部内に悪しき感情がある、之に打勝つといふ必要なくして「義務である」といふ觀念も必要であれ、之に打勝ち義務を遂行する意志力も必要なのである、自己部内に悪しき感情少くもあつればその人には義務の觀念も必要であく意志力も必要でない、その人は渾身愛である、夫故に余輩は基督の「愛」、佛の「慈悲」といふ以て道德の上乗であつて、韓國の無上命法を採らぬのである、よく意志力の必要れなくなくといふことの個人の道德の進歩を意味するが如くに、社會全体より考へても、道德の進歩は漸

次意志力の必要を少くするのである、本來意志力の必要は人間には罪惡の分子のあつて、之に打勝つ力を必要とするといふ事である、此点に於て現今の社會の古代に比して進歩せしことを信ずるを得るのである、武士的氣質、ソツテル、ツッゲン等々の必要は過去の夢であつて、今日の社會は清かなる美はしき紳士(ゼントルマン)を必要として來たのである、ルウソウの道德上の厭世主義を唱道したのも、決して正鵠を得た説ではない、政治家としてもピスマルクの様な人物は十八世紀的の政治家であつて、比較的后に開けた粗野なる獨逸の國土に産物であつて、今後ある英雄は出るゝともあかふゝ又出づる必要も夫程あからうといふことが、たゞか英國の評論誌上で見たことがある、たゞ今乃人は猶下等な野蠻な獸的性情を全く脱しない、従つて之を御するには、牛馬を馭するが如くに鞭撻を必要とする、而して無形の鞭撻は此場合では意志力である、然し凡ての人が正しき清き心を持つた君子のみとなつたならば、渾然たる愛は社會を支配するに至るであらう、夫故に吾人終極理想は圓滿なる愛であつて、此終極に達する爲めの舟車は意志力であらうと思ふ、然し意志力の消滅といふことは、惡を抑ふる必要のなくなるといふ意味にて用ひたる語であつて、自己部内にも社會にも多大の惡れ分子を存在しなから、之を抑ふる意志力を缺くのは薄志である、弱行である、余輩は此間關係を混同してはならぬと思ふ、

校 風 論

清 董 生

蜻蜓州の背部約中点に當り、單身雲中に聳立、形倒鉢に似、四時六騰を冠し、古來文人雅客の吟

咏する所とあり、威風莊嚴、今日猶霹靂一聲二線上を走るの列車中に遠く之を眺望して嘆賞措く能はざらしむるもの、是れ富士山風非ずや。是れ富岳の他の山岳と異なる所なり、若し其山風に類せるものたるかかふんや。或は曰く、某校は質素を以て其校風とし、某校は運動を以て其校風とし、某校は勤勉を以て其校風となす云々と。

借問す學校は如何あるかを爲す所ありや、質素を學ぶ可き所なりや、將た運動を専らすべき所ありや、將た勤勉を爲すべき所ありや、質素固より可なり、運動亦素より可なり、勤勉亦更に不可とあさず、然りと雖ども質素を學ぶ必しも殊更に幾多巨額に國費を投じて、學校の設備職員の養成に汲々として、是れ日も足らざるの必要を見ざるなり、夫の農を見ずや、朝夕稗麥を喫して労働に従事と、是れ質素の至れる者に非ずや、而して又運動専修には別に其専門の學校のあるあり、妄りに諸種に學校をして、一々運動専門の學校たらしむるの必要何くもありや、若し人生を以て幸福圓滿の人たるを目的とするものごせば勤勉一点張の不可なる固より論なし。

夫れ社會進化して、如何に分業は利大なるにもせよ、事一方に偏せるは不可あるは今更課々を要せざる也、食物にして一方に偏せば、身体構成成分の一のみに供給して他に欠くるあらしめ、結極全身を衰弱せしめ、或は死に類せしむるに至る、若し身心の練磨にして一方に偏せば、人として必要なる構成成分の二れみに供給し他に欠くるあらしむるのみならず、過ぎたるは及ばざるよりも其害却て甚しく、運動家は運動の爲に倒れ、勤勉家は勤勉の爲に一身を殺すに至る、抑運動

其ものは身体に害あり、勤勉其ものは身心を勞す、此等相調和して此に始めて身心の健全ある進歩發達を見るあり、凡て人生は調和を要す、豈獨り人生のみならんや、萬事萬物凡て調和を待つと殆んど例外なし、天の時地の利人れ和凡て調和を要せざるか、若し夫れ精神の一方に偏せるを精神病と云ひ得べくんば、則ち其執る所の事の一方に傾けるものあらば、之を狂人として癲狂院に送致するに寧ろ其當を得たるもれたるなかふんや、人は政治に狂奔せるものをポリチカルマニアと云ふ、吾人は此輩を一種のフィシカルマニアと名くるも不可あるかけん、夫のセシルローズが運動家を以て第一に推せるも、是れ畢竟當時の學風に激せるの反言にあらざるんば自己一身上に感激せる所ありて此に至りしのみ

夫れ人情の薄弱なる性々にして其性一方に偏し易く、彼に熱中すれば其反動とて此に冷視し、彼に意を專にすれば其影響として此に留意せず、而も各猶夫々恃む所あり、爲に牽強附會我田引水は自然に勢として迸發するに至り、終に此輩宣言して曰く、我校風振起せざるべからず與作せざるべからずと、而して何れ故を以て其之を校風とすべきや、彼等は深く問はざるかり知らざるあり、生兵法は大傷の基、智者愚者俱に害あり最危険なるは半智者半愚者にあり、彼等は最危険なる地位に立つもれなり、或は怯にして己の信する所を吐露する能はざるもの、或は己の取る所を表はすを耻ぢ或は人に笑はれんとを恐れ殊更に其言を曲ぐる者の如きは志弱く膽氣乏しき人の常云ふに足らず

或は又社會分業の勢と共に、學生も亦各其専門の士ありて、体育に教育に德育に各他を獎勵し他

を鼓舞し互に相並立し、以て其間に平均進歩を求むべきものなりや、換言すれば社會公衆一般の利益を増進する爲には、個人の犠牲を要すべきが如く、學校生徒間にも亦かゝる犠牲を要すべきや、試に思へ幾多學生の多年修養を積み、他日社會に立ちて大に爲すべしと欲し學校に入るもの爲に、犠牲たふんと欲して同様に學校に遊ぶれば仁人は、そも如何ある人ぞ、それ學校は國家主權の行はるゝ安寧秩序の下、人物を養成する所なり、ギボン曰く、人は二個の教育あり、第一は他人より享くるものにして、第二の更に大切なるは自ら教育することありと、吾人は學校に於て教育を受け又互に教育し又自ら教育しつゝあるなり、何を苦んでの犠牲を望まんや、學校は國家其者と異れり、國家社會の如く犠牲を要すべきに非ず求む可きに非ざるあり。

故に曰く、校風は調和にありと、是れ一般校風たるべきものにして特定校の校風非ざるなり、吾人が特定校の校風なるものを主張せざる所以のは、前述の如し、然らば則ち調和とは如何、如何なる程度の配合を以て調和と稱すべきや、數量尺衡的の調和平均は至て易けれども、數理以外の調和に至ては其限度明ならず、必ずや人に由て異り時代に由て異り處に由りて、同一からざるものあらん、然らば則ち之を如何にして可あるもの、或は曰く調和の難き、如何にして調和に達すべきや知り易らざる、寧ろ一に傾て其宜しきを制せんにはと、其宜しきを制するを得ば是れ調和の成りたるなり、調和なくんば何ぞ其宜しきを制するを得んや、一方に偏して而して其宜しきを制せんとするは、木に縁而魚を求むるの類のみ、愈近つかんと欲して愈遠かるを見るのみ、調和なくんば維持なし、維持なくんば是れ破壊なり、故に曰く校風は調和にありと、

調和の難き固より云ふを俟たず、要は可成之に近づくべきにあり、予輩は世の國家は爲と稱して却て大局の利害を誤るものあるが如く、學校の爲と稱して深く省みざるも、一顧を煩はさんと欲するなり。

夫れ人類は萬物の靈長なり、個々相扶け以て社會を維持せざる可ならず、妄りに特定の校風を稱し他の觀覽に供する夫の山風の如くあるべからざるなり。

學生の本領

冠 木 劍 狂

社會墮落の現状は今更言はずとも、將來國家の樞機に參り後世を導くの重任を有する青年者流の腐敗墮落に至つては吾人黙せんと欲して已む能はざるものあり、亦是れ公憤鬱勃の結果に外あつざるなり、豈辯を好むものからんや、韓愈が私憤の類の如きに至つては只桂月樓上の一粟に値せんのみ、何を苦んで北辰紙上を汚すことをかさんや、題して學生の本領と言ふ、劍狂學生に望む所深く、學生を信ずること厚きの餘、此の後世有爲の士をして其の神聖を維持し益々其の本領を發揮せしめんと欲するなり、古語に曰く蕪蕪の言も聖人擇ぶと、讀者幸に其辭乃蕪雜あるを以て併せて其意を棄つるべし。

現時の青年者流を見るに、青年は主腦本領たるべき意氣は一日に銷沈し去り、士氣士風地を拂うて空しく、主義なく主張なく、唯蠢々乎として動き、夢現の間に衣食し恰も草木と枯死し禽獸と同化せんとするもの、如し豈に痛嘆大息以て國家の將來を憂ひざるべけんや、由來青年は意氣

あるを貴ぶ、意氣は即ち青年の本領也、意氣なくんば即ち青年なきなり、否青年なきにあらず、眞れ青年なきなり、敢て青年の意氣を言はんか、輕車馳せ、肥馬嘶き、美服盛装の人絡繹として來往する處、亂髮粗服意に介とるなく、傲然濶歩するもの青年の意氣にあらずや、金殿の内、玉樓の下、美酒杯に溢れ、佳肴器に堆く、美人の私語、才子は高笑鼓吹海の如き時、冷然其の痴態を嗤笑去らんとするは青年の意氣にあらずや、下宿樓上机を打つて古今は英雄を月旦之、王侯將相本種なり、彼等取て以て代るべきれみ底の壯語を敢てして恐れざるもの青年の意氣にあらずや、男兒生れて爰に二句は齡を重ね、未だ嘗て歌舞の宴に列せず、非禮の境に遊はず、枕經籍史、筆硯の裡に棲息し、理想の天地に吟嘯し、箇中の眞味斷つて凡俗の窺ひ知るを許さざらんとするもの即ち是れ青年の意氣にあらずや、夫れ然り、而して彼等青年は果して何によりて此の愛すべき意氣、慕ふべき意氣を得たるり、曰く彼等に功名の心火内に燃ゆるあつて發して以て此の意氣を致したる所以に外かざるあり、

世に權勢あるもの、富財あるもの、乃至學智才藝あるもの、彼等の生命とする所のもれば果して奈何、彼等は權勢即ち彼等の生命なり、富財乃至學智才藝以て彼等を活動せしむるの生活力あり、知らず青年の生命とする所のものは、權勢の、富財か、將た學智才藝り、あらず、あらず、青年は一も彼等を有せざるあり、然らば青年は其の生命とする所のもの一も是れあふざるり、否々更に大に然らず、青年は意氣あり功名心あり、之れありて青年は存し、彼等の本領は發揮せられ、彼等の神聖は持續せられ、以て權勢以外、富財以外乃至學智才藝以外に其の地歩を占むるを得るあり、果して然らば青年の生命とする所のもの亦知るべきにあらずや、

今や此の功名心あり此の意氣あるべきの青年墮落し盡してその上乘あるものは小成に安んぶ、其の下劣あるものに至つては眞に社會の蠹賊とある、是れ其罪過現社會の誘惑に存するもの少からずと雖も學生自身は致す所多きに居るや言を待たざるあり、維新前後の學生は或は粗暴狷介の譏を免れざりしと雖も、彼等は皆雄大ある抱負を有して一世に飛揚したり、是れ彼等は功名乃熱血内に燃ゆるあつて以て意氣をして壯烈ならしめたる故に外ならざるあり、之れを現時の主義なく、主張なく、徒らに小不平又啾々して小功名に満足する墮落青年に比せれば、自ら天淵の差あり、勿論時勢は變轉して推移極まりなく、革命の時期と太平の時期とはその風潮固より同トかかず、從て之に處する所の方法亦異らざるを得ざるものあるは吾人敢て首肯するに吝からずと雖も、太平の時期にありては又太平時の理想あり、革命時の理想と自ら異なる所ありと雖も、而も其の高尙幽遠あるに至ては、太平時の理想は寧ろ革命時の理想に抽んずるもの數等ならざるべからず、何ぞ今日の青年輩平々凡々、草木と枯死し、禽獸と同奔せざるべからざる理あらんや、余如何に青年の高潔を愛するものありと雖も、今日の青年が雄渾壯偉の意氣を有せざるを見ては其の責を青年諸氏に歸せざるを得ざるあり、

今日の時勢は秩序的にして、軌道を逸し常規を脱するは成功の道に遠ざかる所以にして、苟も一頭地を儕輩の間に抜うんと欲するものは經營苦心の後にあらざれば能はず、彼の維新當時の如く一躍して廟堂は議に參り、一轉して大臣となる云ふが如きは今日殆んと夢想し能はざる所なり、

維新前後の事業の如きは、我國は桃源洞裡の夢未だ全く醒覺し去らざりしを以て、嘗て日本國內の事業に留まり、従て一小俊才おして其功名榮達一世の羨望する所となりしと雖も、多くは是れ浮雲の夕陽に耀々たる一般、一時的にして世人に忘却せらるゝと甚だ速かあり、若しよく此種の真相を悟了するを得ば豈に深く羨望するに足らんや、之に反して今日の時勢は全く世界的の時勢にして、其範圍甚だ廣大又一小天地に齷齪たるを許さざるあり、我が帝國が一度浦賀の砲聲に其の迷夢を覺破せられてより、文物制度駸々として進み、治外法權を撤去し、威武北清の野に振ひて以來全く世界列強の伍伴に加はり、治國濟民に規模悉く世界的のものたらざるなきに至れり、この故に爾來日本は俊傑たり、日本の偉人たらんとするものは、世界的の大人物たらざるべからざるあり、而して其事業の影響する所亦單に一小帝國に止まらずして汎く列國の間に波及すべし、列國環視の間に立ちて大事業を成と、大丈夫世に處するの愉快豈に之より大なるものあらんや、今や此の一大好機會は正に吾人の眼前に展開せられつゝあるあり、今日の青年たるもの何ぞ憤然蹶起以て大に此の機會を利用し其の本領を發揮するに努めざる、

今の世は實に權勢の世なり、黄金萬能の世なり、權勢ある者は權勢を以て誇らんとし、富財あるものは富財の力に依て他を凌駕せんと欲す、此の時に當て青年は何を以て之に當り、何を以て本領とあさんか、意氣の高潔ある唯夫れ是れのみ、此の不屈れ意氣何によりて之を得べきの、功名心即ち是れのみ、噫誰の功名心を以て賤むべしと爲すや、それ功名心あるものは、理想精進の念、精力維持の府として、人生活動の樞軸たり、是れありて青年の未來は光榮の邦士たり、金花咲き、

玉果實り、神樂起るの樂園たるあり、苟も青年にして功名心なからんか、動力なき機關に外ならず龐然地域を充て用なき死物と擇ぶ所なきなり、凡そ雄大の功名心を有するものは、屢々時勢と戦はざるべからず、屢々戦つて屢々敗れざれば成功の域に達すること甚だ難しとあす、而れども一度成功の彼岸に達するを得んや、よく時勢を自己の藥籠中に收め得て愈々益々其本領を發揮するを得べし、凡そ洋々たる長流も一度巖に觸るれば激して急湍とあり、更に高きに懸りては躍つて飛瀑と化し、細霧濛々として泡沫四散し、眞に天地の偉觀を極む、人生世に在る亦此れと觀を同するもれあり、順境より逆地に入り、活動より靜止に移り、得意より失意に沈む、昨は温飽閑日月を送るも今は飢て蕪薇を山間に掘り、空しく謫地に草を培して徒々に昔日の榮華を夢むるものあり、眞に人生の歴史は慘憺たる一部の戦闘史に外あらざるなり、縦ひ白刃前に輝き砲火後に接するの慘たる光景なきこととも、時に或は急湍となり、或は飛瀑となりて相隣み相搏ちて終始息む時なく談笑聲裡自りら搏撃争奪の跡を絶たざるなり、

凡人、絶大の偉人にあらざる限りは到底世外に超然として時勢と戦はざるを得ざるべし、古來偉人傑士と稱せらるゝもの皆な是れ時勢と戦ひて屈せず死して後止むの慨ありしに因るのみ、幾萬無數の凡骨、這裡に手を束ねて空しく槽槌の間に死を遂げしも因より亦怪むに足らど、時勢の推移する其力や斯く偉大なるものありと雖も、時として其進路を誤り邪逕に陥り、正邪地を換へ、善惡種を異にする事あしとせず、古昔孔子陳蔡於野に困みて天下に容れられず、耶蘇猶太の民に虐せられて十字架上の露と消えき、是等は正しく正邪地を換へ善惡種を異にせし時勢に外

ならざりしあり、我は遂に斷して此れ如きの時勢に盲從する能はざるあり、時勢が誤つて此の如き邪道に其の進路を向はしむる事あらば青年諸氏は當に蹶起して時勢の爲めに唱導し其の逆流と戦ひ、以て之れが羅針となり世人を導くの意氣あかるべからず、功名の情火内に熾んたるものあるに當つては是の意氣亦常々潑刺聲あるべきなり、たとへ此の如きと至大の難事に屬すと雖も、男兒空しく爲すなくして熄むべけんや、之れと戦て敗る敗ると雖も固より憾なく、青年の意氣あるもの固より成敗利鈍に關せざるあり、

余はマルチン、ルーテルの意氣熾んたりしを讚して措かざるものあり、權勢富貴熾ゆるが如き帝王百官の間に立つて少しも屈するとかく極力法王の腐敗を痛罵して止まざりき、彼は遂に時勢と戦つて能く其の勝利を制するを得しもの、カアライルの評して以て文明の曙光全くルーテルに萌芽とあすもの蓋し其當を得たるものと云ふべし、彼は實に社會の先覺者たり、時勢の誘導者たりしあり、彼の羅馬大帝國が盡く希臘文明に洵化せられて、文弱風をかし遊惰俗をあすに當つて、コンソル、カトウが極力時勢の風潮に反抗して羅馬の國粹を既倒に挽回せんと努めたるもの、大厦一木遂に支へ難く、千古の恨を抱て死し、羅馬遂に昔日の盛を見る能はざりきと雖も、彼の意氣の高壯誠に崇むべく、彼亦遂に一箇の好漢たるを失はざるあり、此等の傑士皆是れ功名の熱血内ふ沸騰して以て此の意氣を致したるに外ならざるなり、

今や世は日に月に澆季に流れ、士氣頹敗して亦尋ねべきなく、世を舉げて權勢に走り、金光の榮たるに眩暈し、節操を賣り、主義を鬻り、人を陥れて己れを利せんとし、時勢は滔々として墮落の淵に瀕しつゝあるあり、今にして之れを挽回せざんば又遂に拯ふべからざるに至らん、而して之を拯ふの任舉げて青年諸氏の双肩に在り、諸氏功名の情火に油して意氣を熾んにし以て時勢の逆流と戦へ、よし敗死すと雖も亦餘榮あるなり、是れ即ち卿等の本領あらずや、男兒生れて虎賁士たるを願はず、謀術の策士たるを望むと勿れ、唯萎靡頹倒、席を捲いて來るの時勢と角闘せむ事を期せよ。



雜 錄

讀 史 雜 話

浦 井 恒 堂

討論終結(Conclusion of debate)

我帝國議會に於ては討論終結博士の綽名を得たる代議士すらもある程の次第なれど我のことは全然發達の方法歴史を異にせる英國議會に於ては由來議員よりうる動議を提出するは辨士に對する侮辱にまで許すへからざるの無禮と認め絶對に許されざりしり極めて晩近の時代に至り事情止むを得ざる者ありしたため終に古來よりの傳承(トラディション)を捨て討論終結に關する規定を見るに至りぬ

前世紀初に於て加特利教徒放釋案の發布以來始めて議會に於て眞れ愛蘭代議士を見るに至りたるが彼等は最も熱心に愛蘭救済を呼號し其領袖ダニエル、オ、コンネルは彼等を率ゐて巧にホイッグ及びトリーリイ兩黨と操縦し機に應じて其一方を援け常に少數議員を以て二大黨の死活の權を握り以て愛蘭の利益と謀るに盡瘁せりされど此作戦法は未だ充分といふ能はざるは是に因り後愛蘭に關してはホイッグ、トリーリイ兩黨の聯合とかり愛蘭黨は志を伸ぶること能はざりき是に因り後愛蘭無冠王の綽名を得たるパーネルの出で愛蘭黨の魁首となるやコンネルの操り來たりたる作戦法を一變し全然中立の愛蘭黨員の堅陣を作り盛に議事進行を妨害すてふ奇策を行ふに至れり其目的愛

蘭問題解釋の後にあられは他は議案を議する能はさらしめ因て議會をして愛蘭のため讓歩せしめむとするにあり蓋し英國議會古來の傳承ふより議員の發言を以て神聖として議員は時を撰はす何等の制限無くまで何時間にも發言を繼續し得可く何人も決して之を妨害すべからざる者こそせり故にパーネルは此風を利用し一議案の一章一句毎に質問を爲し修正説を持ち出して喋々其理由の説明演舌を爲し其説既に盡きて採決とあるや更に可否の數に付て苦情と提出して vote by division を要求し(英國議會に於ては賛否の兩者議場に分別して其數を調ふなり)其も確定する時は次に出席數定員に充たざること等言ひ立て出來る限り時間を延長せむとせり此法は少數の議員と雖も豫め能く打合を爲し交代休憩の時間などを定め置きて交るゝ議場に出席するときは思ふまゝに實行することを得可く議會の困却察するに餘ありといふべし此法を名けて議事妨碍(Obstruction)といふ此事たる嘗て議會に於ける少數黨は依り用ゐられたる先例なきにはあらざれども其は極めて稀有な場合に屬し、今やパーネル等は容赦無く最も秩序的に此法を行ひ一八七七年南阿非利加法案の議事の如きは水曜日の午後より始まりて木曜日午後二時に至れり當時之を Irish Brigade の喧嘩といへり議會終に忍ぶ能はず之に對する制裁を設くるに決し議會の先縦を破りて凡そ故意に議事を阻碍するの形跡明なるに於ては議長は討論終結の動議提出を冀ふ旨を宣言することを得べしとせり是は萬止むことを得ざるの措置にして一八七九年の議會に於てある愛蘭黨員は實に五百回の發言を爲しある者は三百六十九回の發言を爲し、と云

其後一八八〇年頃より愛蘭人民の動搖再び始まりある地方に於ては小作人蜂起し地主を襲ひ殺人

放火は暴行を逞ふし英蘭人の興せる愛蘭土地協會は宣言書と發して小作人を激し協會の定たるより以上の借地料を拂ふべからざるを命し此命に背く者に對しては盛にボーイコットを行ひ之を窘めたり此ボーイコットは始めて之よ遭ひたるキャピテン、ボーイコットの名を以て呼ぶに至れる者中世時代は宗教破門と同じく一切其人との交通を斷つをいふ於是グラッドストーン内閣は緊急の案として二の法案を議會に提出せり其一は愛蘭大守に臨時大權を附與し愛蘭を以て臨戰地境と宣言し臨機兵力を用ゆるを許さむとせる者其一は法律手續を踏まらずして亂民の拘禁を行はむとする者にして此二者を併せて愛蘭強制法案 (Irish coercion bill) とす此案に對し議會なる愛蘭黨員は必死となりて妨碍法を用ひしかは此議事は正月廿一日 (一八八一年) 月曜日の午後四時より始めて水曜日の午前まで即ち四十一時間繼續し議長終に忍ぶこと能はざるに至りて採決に附し始めて通過せり此例に鑑み一八八二年議會は新に討論終結の法を設け凡る討論終結を發議するの權は獨り議長のみ之を有し之に反對する者四十名ある時は之を議場に問ひ終結を可とする者二百名以上あるにあらざれば討論終結を宣言することを得ざる者とせり

されと其後の實驗によりて此法の猶不備なることを發見せり何となれば議長は議會の傳承を重するの考と嚴然中立の態度を守らむとせるの熱心とにより故に妨害を與へんとするの情明瞭なる場合に於ても新に議長に與へられたる特權を適用するふとを慎みにより此規定あるに拘らず議事妨碍の法依然として行はれたればなり

後一八八七年サリスブリーの保守黨内閣は政府案の通過を謀るの一手段として此討論終結に關す

る規定を改正して一層嚴ぐる者とし従前此二百名を改めて百名とし四十名の反對者に對して百名の賛成者あらずは直に討論終結を宣言し得ることとせりこれ英國議會に於て議案の採決に付せざるは概して午前二時乃至三時あるを以てかゝる深夜まで二百名の多數の政府黨を議會に留め置くこと頗る困難なりしを以てなり又これと同時に從來は議長の特權ありしを改めて何人も討論終結を要求し得ることとせり政府反對黨 (自由黨) は口を極めて此改正を罵りこれ討論の終結 (closure) にあらずして斬首臺 (ギョツチン) なりといひしが後年自由黨内閣のなりたる時は彼等も亦た此法を用ひて政府の通過を謀りたりと

ミスシッピー詐欺事件 (Mississippi Scheme)

は殆んど同時に英國に起れる南海詐欺事件と相並ひて歴史上著名なる投機事業あり初め一七一五年佛王路易十四世殞落して曾孫路易十五世踐祚を年甫五歳十四世の甥オルレアン公フョリツア政を攝す是時に當り前代數度の大外戦に加ふるに朝廷は豪華を以てせしかは佛國財政案亂れ極に達し歳出一億四千七百萬フランに對して歳入僅に六千七百萬あるのみ且つ巨額に國債あり國家的破産 (ステートバンククラッシュ) の危機既に逼れり時にジョン・ロー (Law) といふ者あり蘇格蘭エヂンバラの金匠の子なり家道豊なりしかは充分の教育を受け殊に算數及び理財の學に長せり長して後屢々大陸諸國に遊ひ歐洲に重かる商業國の金融事情に關して大に得る所あり其より後は専ら賄賂とて佛國和蘭獨逸以太利地方を横行し僥倖にも二三百萬フランの産を爲すに至れり彼は夙に信用制度に就きて講究する所ありて種々の論説を公にせしめ就中最も價值あるは一七〇五年エ

デンバラに於て出版せる貨幣と貿易と題せる一書なり彼の經濟的觀察は蓋し正鵠を謬らざる者といふべく當時流通せる貴重屬の貨幣は其量乏しく日新の貿易の發達に訪ひて其供給を充分ありしむる能はざるを以て信用制度の發達を促かし紙幣を以て硬貨に代へざるべからずといふにありて彼は紙幣か早晚實際の通貨となるべきを確信せしなり次は彼は零碎の小資本を吸収して大資本と爲さむとを謀りて稍得る所あり先づエヂンボロー及び倫敦に於て彼の財政策を説きしか本來著實主義ある英國に於ては毫も贊成者を得る能はずサボイ公に説きて容れられず轉じて路易十四世の晩年巴理に來たり彼容貌秀麗貴公子を欺き佛語を操ること流暢に巨萬の資産を擁し博奕に巧ありしは大に巴理流行社會の歡迎せる所とあり終に攝政オルレアン公の知遇を得るに至り之に説くに一擧して佛國財政を整理すべきを以てすオルレアン公始めは深く信せず先づ彼の願により巴理に於て一株式銀行を設立することを允許せり(一七一六年)ローは最も熱心着實に任務を勵みしのは其信用大に加はりオルレアン公も漸く彼を信じ翌年更に大なる範圍に於て彼の考案を實施することを許す然るにローは野望勃として禁する能はず一大投機を行ふに至れりこれをミスシッピー計畫といふなり彼は先づ *Compagnie d'Occident* と名ぐる一會社を設立し當時佛領ミヌッビー地方の富源に就きて種々の妄想行はれ居たるに乘し此地方の殖拓を謀らむことを聲言し該地方に關して既に政府より特許を待居たる他の會社と合同して *Compagnie des Indes* と改稱しローの管理する銀行をして其株式を引受けしめ凡ゆる手段を弄して會社の收益の莫大あるべき旨を吹聴し巨額の利益配當を爲し、かは天下の人心靡然として之に向ひ株式の昂騰すること甚しく五十

リールルの者忽ち一千リールとなり更に二千リール即ち額面の四倍となり人心殆んど狂する如く凡ゆる財産を賣りて此株券に代へむとし新株發行に際しては會社所在の *Rue Quincampoix* の雑踏甚しく時としては壓死者を出す程の混雜ありきこそ其人民狂奔の有様を見るに足る一例は一駝背漢あり該街に立ち其背を以て株式申込人より申込用書に記名するため几案に代用するを許し、に一年に間に十五萬リールの産を興し、といへり一八二〇年ローは佛國の國教羅馬加特力に改宗して *Genera Contrôleur* 即ち大藏大臣に任せられ同年巴理理學協會は彼を推して會員と爲し、の名稱一時に轟けり

然るに幾も無くロー及び其腹心の輩は秘密に其所有株券を沽却して土地家屋に代へること暴露せしかは形勢俄然一變し一瀉千里の勢を以て株券の暴落とあり勢防くべからず因てローは絶望の極大臣の職權を濫用して之に當らむとローの銀行を國立銀行と合併し紙幣を濫發して一時を姑息せむと努めしか既にローの信用地に墜ちしを以て紙幣を信用する者一轉して紙幣の下落とありしを以て種々の人工的手段を用る先づ三百リール以上の取引は硬貨を用ゆるを禁し次に五百リール以上乃至硬貨を貯藏するを禁し各戸の大搜索を行ひ硬貨を引上げ其代りに紙幣を下附せしむ此所謂 *money-hunting* は全然失敗に歸し人々巧に貨幣を隱匿せしむは政府は大搜索の結果僅に四千四百萬リールルの硬貨を得しに過ぎざりき因てローは益す激烈の手段を行ひ金貨の流通を禁止し銀貨は補助貨としてのみ流通を許し、に十フランの小紙幣を以て銀貨と交換を求むる者相踵き或日の如き一時に一萬五千人麇集し來りしたためケンカムボワ街に於て壓死者十數人に及へり政

府大に驚きてローを罷免し、七二年の未既に發行せる三十億七千一百万フランは銀行紙幣は突如として流通禁止となり爲めに産を失ひし者擧て數ふへらふと十二月は巴理より奔りむとして路人は觀破する所となり其馬車は寸々に壞たれローは身を以て脱し以太利に赴きしか後三年にして死せり

南海詐僞事件(South Sea Bubble)

佛國はミスシッピー計畫と時を同うして英國に於ても之に譲らざる大恐慌を生ぜり其由來を尋ぬるに時の内閣はトリイ黨なりしためホイッグ黨の堅城となれる英國銀行は政府の公債引受を肯せず是に依りオックスフォード伯ハレーは富豪の徒に内諭し彼等をして一千萬磅の公債を引受けしめ六朱の利子を交附するの他商業上の特權を與へむことを約せり而して恰も佛人かミスシッピー地方に就きて架空的の富源を豫想せしと同く英國お於ては南米ペリユー地方の富に關して種々の風評行はれしかは彼等は時好に投して South Sea Company とする貿易會社を組織し直に商業界に於て重要な位地を占むるに至れり而して政府は大に此會社を保護し西班牙政府との協商により南米ある西班牙領の獨占權を得へき望あることを漏し、くは會社に對する人氣旺盛とあり人々先を争ふて其株券を得むことを望めり反之該會社は單に一回一隻の船を南米に向け航せしめたるれみにて毫も南米貿易に従事せず主として銀行事務を營めり兎に角社運益榮えしうは重役輩は愈よ其營業を擴張せむとし更に政府に向ひ當時の國債三千萬磅を擧げて引受けむことを申込み其條件として政府は向ふ七年半の間は五朱の利子を拂ひ其後は政府財政の模様は因り直

に償還するも又は据を置くも隨意たるへく利子は減して四朱となすべしといへり之を見て英蘭土銀行も起て大に競争を試みしう此案の議會に提出せらるゝや上下兩院共に南海社の申込を應ずべきに決せり此時に至る迄は南海社の重役輩も實着に銀行業を營むに過ぎざりしう彼等は今や其社の信用鞏固にして如何程巨額の資本と雖も一呼して吸集し得へきを悟るや其信用を利用して一大詐僞を働くに至れり其經過は全然佛國れと同じきを以て述べす

此南海社の隆盛なるや之を羨むのあまり起業熱の流行盛にして皇太子を始め貴族富豪の輩先を争ふて種々の事業會社と設立し其數約二百餘之に投入せる資金無慮三億磅に達し、が南海社破産と前後して皆土崩瓦解し去れり今其會社の二三を擧ぐれば愛爾沿岸に於て流材を拾ふ者雇人の爲め物品を竊取するゝを保險する者曹達水に甘味を付くる者向う葵の種より油を搾取する者麥芽より精酒を作る者鉛より銀を得んとする者水銀と硬質を變せむとする者西班牙より大猿を輸入する者人の毛髪を買入れる者などあり其他此に類する者擧ぐるに遑わらず

Tulip mania

我邦に於て時々萬年青の賣買流行せしことありしう西洋に於ては十七世紀の中頃に於て鬱金香の賣買甚しく行はれ産を傾くる者多かりきといふこれを Tulip mania と稱す是は元來アリミア、アルメニア、イルチスタン、アルタイ地方の特産なりしう獨帝フェルチナンド一世の大使之を君丁坦堡に得て始めて歐洲に傳はり(十六世紀の中頃)次第に其培養流行するに至り十七世紀の始に於ては百四十餘の異種を見るに至り終に其投機賣買始まり一六三四年乃至四十年頃まで盛に行はれし

か其最も激烈を極めたるは荷蘭にして一花を得んたる一千三百ギョニヤンを抛つて至れりといふ

REFORM OF ENGLISH SPELLING

E. Snodgrass.

English spelling needs to be reformed. Benjamin Franklin in his day wrote in favor of its reform; and Noah Webster, the pioneer of American Lexicographers, repeatedly urged it. In a short article I can give only the briefest outline of the reforms proposed. The fonetic method of spelling, which is the only philosophical method, is the one which the American Philological Association approves, and seeks to introduce. However, as the complete reform of a language cannot be accomplished at once, but must come about gradually, the Association is not recommending any sweeping changes. It has prepared a list of about 3500 words to begin with. These amended words are all given in the latest English dictionaries. They are gradually being adopted by periodicals and writers. A few years ago the Hon. W. T. Harris, U. S. Commissioner of Education, issued from his Department a very excellent review of the Spelling Reform, which review was written by Prof. F. A. March, President of the American Philological Association.

I should mention also here that the membership of both the American and English Philological Associations includes such names as Profs. Max Müller, Sayce, Murray, Whitney, March, Haldeman, Mr. Gladstone, Darwin, and Tennyson. Mr. Spencer has also written in favor of the reform. All of the

above named scholars (several of them now deceased) have given their influence in favor of reforming English spellings.

Several years ago Mr. R. Masujima, of the Imperial University, while in America, called upon the President of the American Philological Association to investigate the new fonetic spelling. The information he gained was useful in the introduction of Roman letters for Japanese words.

In the United States much interest has been manifested in this subject by educated men. They have pointed out the great difficulty of spelling the English language correctly. And this difficulty is greatest to foreigners who attempt to learn English.

What, then, are the reforms recommended? The rules so far formulated are ten, as follows:

1. *e*.—Drop silent *e* when fonetically useless, and write—*er* instead of—*re*, as *live* (live), *sing* (sing-*le*), *eat*n (eat-en), *rain*d (rain-ed), *theater* (theatre), etc.
2. *ea*.—Drop *a* from *ea* having the sound of short *e*, as *feather* (feather), *leather* (leather), etc.
3. *o*.—Eor *o* having the sound of *u* in *but* write *u*, as *above* (above), *tong* (tongue), etc.
4. *ou*.—Drop *o* from *ou* having the sound of *u* in *but*, as *troub* (trouble), *rough* (rough), etc.; for—*our* unaccented, write—*or*, as *honor* (honour).
5. *u, ve*.—Drop silent *u* after *g* before *a*, and in native English words; and drop final *ve*, as *guard* (guard), *guess* (guess), *catalog* (catalogue), *league* (league), etc.

6. *Dubl* consonants may be simplified when fonetically useless, as *baillif* (bailliff), *battl* (battle), *writin* (written), *traveler* (traveller), etc.; but not *hall* (hall), etc.
7. *d*.—Change final *d* and *ed* to *t* when so pronounced, as *lookd* (looked), etc., unless the *e* affects the preceding sound, as *chafed* (not chaff), etc.
8. *gh, ph*.—Change *gh* and *ph* to *f* when so sounded, as *enuff* (enough), *tafter* (laughter), *phonetic* (phonetic), etc.
9. *s*.—Change *s*, to *z* when so sounded, especially in distinctiv words and in -*ise*, as *abuse* (abuse), *advertize* (advertise), etc.
10. *t*.—Drop *t* in *teh*, as *cacth* (cacth), *pitch* (pitch), etc.

These ten rules cover about all the changes proposed at present and the unravel sum of the puzzling English forms. Mr. A. J. Ellis tells us that the letter *a* represents eight different sounds in English; *e* represents eight; *i*, seven; *o*, twelve; *u*, nine; *y*, three. Twenty-one consonants have seventy sounds. The sound of *e* in *be* has forty equivalents. Take the word scissors. It has only six elementary sounds; and yet it could be spelt *schissorswrtice*, and in 58, 365, 439 other ways. This condition of things in a language is absurd.

Whence arose this irregularity of English spelling? It has been discovered that much of this irregularity arose in the seventeenth and eighteenth centuries from an attempt of the schoolmasters to show by the spelling of words what *they supposed* to be their historical derivation. Then Norman scribes attempted to pack up the Anglo-Saxon; and absurd forms arose which could hardly be pronounced. It has been discovered that a strictly fonetical spelling of English words indicates their history much more accurately than the present forms of spelling. Many of the forms arose from simple typographical errors.

The present method of spelling is a terrible tax on the memory, and a consumer of time and money. We never are sure about the spelling of English words, and must always be going to the dictionary.

It is estimated that two years of a child's school time is lost in trying to learn to spell, and that the old method is the cause of the alarming illiteracy of the people.

The old method causes the useless expenditure of millions of dollars yearly in printing and writing. It is a barrier to the spread of civilization.

Let us here mention a few of the advantages which the new spelling would confer.

Over 4% of printing and writing would be saved. A \$4 book would cost only \$5. The Encyclopedia Britannica would be printed in 20 volumes instead of 25 volumes, and would cost 24% less. The newspapers would save one column in six. One sixth would be saved in all writing. One sixth of the labor of clerks in post-offices would be saved. Over 720 hours of spelling lessons would be saved

to the children. One half the tune of teaching spelling would be saved. England alone would save more than \$2,500,000 yearly. And many other advantage would follow which we cannot here mention.

In the united states considerable progress has already been made in adopting the new spelling. The new dictionaries give all the amended words. The following periodicals have to a greater or less degree adopted it: *The Educational weekly*, *Journal of Education*, the *N. Y. Times*, the *chicago Tribune*, the *St Louis Republican*, the *Electrotyper*, the *Type Foundry*, the *Quadrant*, the *Electrotype Journal*, the *Independent*, and others. The *Voice*, edited by the writer of this article, and published in Tokyo, uses the reformed spelling.

In the matter of English study in Japan the reformed spelling would be of great importance, and I should like to see sum steps taken to introduce it into the English classes. I have especially noticed in the English compositions of Japanese students that frequently words are unconsciously spelt according to the new method. This illustrates how irrational the old method is.

It would be a splendid thing if the teachers of English in this country could form an association for the special investigation of this important subject.



文 苑

美文

さまよひし一夜

聽 水 子

世はかゝあべて和風麗花の春あれや、語るに友なき浮萍の身は、頭々々として果敢なきおもひに流轉榮枯のすみやのなるをかこち、むのし南歐の草青き野邊にさすらへ薄伴の年少詩人があとを追懐して、行く水にその名をどめ「歌人こゝに眠れり」てふ文字、いたくわが心を惱ます種とばかりつ。人生果して幾許ぞ、邯鄲の枕頭芳夢一たび醒めては、耳邊忽ち祇園精舎れ鐘の音ひひのむものを、何の思ひの胸に燃えて、人は富貴に趨り、名利の巷にさまよふある、たもへばくわれも亦愚なりけるよ、名利の塵にかゝつひ、富貴の雲にあこがれて、人を怨み世を恨み、獨り熱き涙を双の袂につゝみかねたること、そもいくそたび、あはれ、此世を浮世とはたがいひそめし言葉そも。

われはおもひに堪へざりき。堪へざるあまり。拾萬都城の汚塵をわすれ、混濁をはなれ、さてはあらゆるさづなを断ちはて、自然のわたりの懐に、しばし身を托せ思ひのまゝお耽らむと、破帽弊衫のあやしき姿をそのまゝに、金澤驛より汽車に搭ずれば、美川に着けるは遅々たる日脚も、小舞子の松が枝にたそがれろめて、春こゝいへど夕れ風や、肌寒く、十日あまりの月いとさ

やかに澄める頃ありき。

やがて何龍橋を渡り、右に折れて砂白く姫松くろき磯づたひに、思ひの痕は晴れやふねど、萬里の清風滄溟より來りて髪を吹き衣を撫づるすがくしき、折から里の童女らが家路にうへる鄙謠遠く、謾々たる松籟にたえつ續さつするやど、げに心行く限りなり、憂愁しはは消ゆるがごと、魂魄飛んで吟情涌く。この時われに一巻の詩集あらば！

われにもあらず歩むこと二三町、今や塵寰へだりて萬斛の仲亦わが胸を去りけらし、甲斐なき思念に疲れはてたる愚さよ。若うず一葦長風に駕して更に天地の靈光に心清めばやと思ひたちけるまゝに、もと來し方へとわゆみをうつせば、渚に立てる六十路あまりの船人ひとり。こはよき便りと歩み寄りつ、おどろくさむもほいかければ、いと物靜かに、やよ船人よ、少時われをのせて漕ぎ出でずやと問ひうくるに、つくづくわれを打まもりて、いづも、如何なる御身の、何方へ行かむとてか、かゝる濱邊にさまよひ給ふやと、いぶなり問ふも理りにふそ、われながくあやしと覺ゆる姿して、今や里にてはねをましましものを、たゞ獨り波打際にあゆむなる。われはのさねていびぬ。船人よ、われはあやしき狐狸にしもあらず、今宵月いとあかきまゝ、天地無限の浩氣に嘯くむものと、さてはわざく金澤より來りしあり、障りだにちくばしばしわれを乗せて海上に浮びてよ、こがねは老爺の望みに任せむといへば、老爺よろうかうかづきて、さなりしう、そはいこやすきここにこそ、今漕さいでむ、いざさせと、げま里人はうれしくりけり。やがてかなたの岸につかげるつな解きはちちつ。孤舟飄然、櫓聲呟軋、老爺とわれとは已に蒼海の上に在り。」

水天蒼茫、風風きて北海眠るが如く、天や水なる、水や天ある、靜寂の感想はそゝろに涙もろき身にしみつ。徐かに舟中に凝立すれば、幾條の銀蛇飛ぶもどしきりに、萬里金粉をちらし、玉珠を轉ずるよとみゆるは、やがて月光波にくだくるなり、折ふし漏れくる款乃の聲、きゝかれぬわれには俗腸を洗ふ天樂のとも怪まれぬ。うへりみすれば、白山、妙法、醫王の諸山、東天遙のに一架の白雲たきびくと疑はれて、蟬が苦屋に燈火星よりも瘦せたり。あはれ、自然の美の妙へなることよ、あはれ、自然の美の崇高あることよ。此時老爺も感に堪へざりけむ。客人よ、よきけしきとはおぼさずや、日ごろ雨いとしげくて月を見ること稀ありしに、今宵浪いとしづけく月もまたなくをかしげなる、あなかも一ろの夜あらずやと、高調一漕、舟はゆらくとして海神われにさゝやくと覺ゆ。

興に乗じて老爺得々として土地自慢の物語をはためぬ。樸柄なるその言葉、われの心をひうぬこにはあらねど、またもや悲哀の迫りきぬ。傷心永くわれに在り、あゝる自然の美を見るにつけても、れもひうらぶよ人生のこと。如何なれば自然れみ清くたふとて、人の世のみはかく汚れたる。人は癡愚とあざけらむ、世は癡狂と笑ふども、われは此世を厭ふあり、あや、いまはしの世あるかな。げに世はいまはしきものありけり、尊卑を問はず、貧富を問はず、賢愚を問はず、はたまふ天壽れ長短を問はず、彼等はあべて罪惡の塊のみ、汚れし心は彼此同くつむ。情を抑へ色をうごかさざるもれば大なる人とせらるゝなり。離愁に泣かず、公憤にいさまず、枯木死灰の如くかゝは、世は偉人なりとたゞへあむ。利にあらずんば事に従はず、名にあらずんば事にあづ

からず、いふかれば争はずして交ることを得ざるぞや、いかなれば闘はずして生くることを得ざるや、あゝ、人は世を厭ふことゑの弱く小なるをいへり、洵に厭世のことゑは凶音ならむ、さはれ、世の罪惡を見ながし黙して看過す人、果してひろしといふべきの、氣力あるべきや。世の果敢なきを知りながし名利に迷ひて人生の歸趣を觀せぬ人、果して大といふべきの、賢なるべきか。われはうがなしくてそらに涙をのみぬ。思ひはいかよつとくとも、われは非を非とすなる厭世の眞心あるにつきて、ながく已を欺き人を偽る世の醜夫等と交はらざるべきか。厭世の人には生命ありき、偽善者流にこれかかりしや寔に久し、あゝ、塵の世や、混濁の世や、黙思に沈むわが耳に老爺の話いつか入らずなりぬ。

老爺はわれの答へききに、それと悟りもれならし、漕く手をやめて問ひけり、客人よ、御身は先程より深き思ひに沈み給ふさまあり、戀しきほどの惚ばれてか、ゆゑのしき思ひの胸にあまりての、漏させ給へ、いざ聞ひむと、笑ふもいとましかれど、忍ぶれもひれ穗に出でにけむ、いりすがに耻しき心地もしつ。いふとよ老爺。戀ら、あらず、望か、あらず、われは只世をはかみて、……………老爺よ、わが身は山の彼方の笹文峠のそのまた奥に生れしもの、よゝなきおもひにかゝらずば、朝夕蕪穢ある兒と野山をのけめぐり、長しへに世と相へだりて、われも太平の寵兒なりけむものを、書を讀みしはそもわが一生のあやまちなりき。未だ人生の何者たるを知らず、世途の險難を解せぬ身は、獨り焔煌たる青春の希望にみちちて、青雲何ぞたのきを憂へんやと、一鞭の快馬風しませ塵ひちちびちがふ裡に游子とありしは、今より十年の昔とすぎぬ。

うくてわれに負郭の田あるにあらず、家に磨石の貯へもあけれど、やうくにして父母は情に足らぬこともなく、いづらに學の窓よいそしむしも、ひとし南風悲愁をのせて、忽ち恩愛ふりきたらちねの、こころへにうへらぬべくゆき給へりし、人生何ぞ匆忙のはなはだしき。此時われ齡十五の秋、若き胸にはいかにつらかりしよ、まゝて幼き弟妹もあるものを。幸なき星の下に生れし心には、はやくも寂しき世相を觀しそめてき。人は情の輕きこと翻雲覆雨も雷なざるを知りたりも亦此時なりき、誠實友に交はれば、反つて迂漢世情に通せずと侮られ、たましく情に訴ふれば、厚顔愧を知らずと罵る。春の海原なす穩くに、谿間の清水のごと清らなることゝも、漸く亂れて偽多し、青春既にゆく如き、幾のあと、世に立ち出で、逆潮を凌ぎ、荒波に棹さむまは、わが身あまりに蒲柳の質なり、心よはし、むしろ退いて戀に隠れむか、酒に溺れむか、あはれ老爺よ、此世をば果敢なき世、偽多き世とは思はずやと語れば、老爺あまた、びうなづきつ。さていひけるは、さあり、げに此世は果敢なきよ、偽多きよ、若き御身の年ごろより、世のなりはひにつとめつ、鬢髮悉く霜をなすおのれの如きに至らむは、いとくつとさきわざにこそさはれ男の子と生れし身の、我執の嬉遊に夢死せむより、苦しみ、はげみ、戦ひ、又泣くべき生涯を送くるさん、いや勝るべき、丈夫すべからず天棘地荆の間に血を流して立つべきのみ、花のむしるに温りき一夜の夢を何せむと嘯くはひ、そらに彼れのむかしのしのばれぬ。

月冴え、波いづらに、沖の漁火三つ二つ。

げに三春の行樂は落花とにもむなしどり、戀も眠るも愚かあり、酒にうくる、更に拙志。はか
き浮世、いつわりの下界、悟りはこれにて足りなんよ！

人の生れて浮世に在る、「愛しつ、祈りつ、歌ひなん、これぞわが身の生命なる」とうたひけん、
ラマルナーヌのそれなぐで、われはアルフレ、ド、ヴ^ニの、「長き苦業にいそしみて、運命の
さけぶろのまゝに、悶へて黙して死せんかな」といへる悲哀の冷刻に従ふべきか。

Aimer, prier, pleurer, est également lâche.

Fais énergiquement ta longue et lourde tâche.

Dans la voie où le sort a voulu t'appeler,

Duis après, comme moi souffre et meurs sans parler.

— Alfred de Vigny.

月下犀水の畔

月

聲

一夜孤燈の下に書を繙くこと若干頁、其數未だ多きにあらざるに、すでに眼は疲れ氣は倦みたり、
強ひて讀むとも益あかるべし、ことに心何となく落ち付かざれば、いで心の儘にそこらこゝら逍遙
せんとて、犀川の畔に、重き歩を運びたり。

流に沿ひて溯ると數丁、櫻橋といふあり。こゝに佇むと暫し、またもや流に沿うて上る。われは
今まで何を見つゝ、何を思ひつゝ、歩を運びたりしかを、われながら知らず、何を見たりしや、何
を思ひたりしや、また答ふること能はざるなり。襦袢袂を去ること丁余にして、眼界や、廣し。
われは知覺を恢復しぬ。

今宵は正に陰曆八月十八日の夜なり。空はさみがら拭へるが如くに露れ渡り、月は醫王の山角と
出づること既に百尺、團々として明千里を照す。向ふの岸は寺町臺あり。東の方奥深き山より岐
れ來り、小立野といふ同ト様ある丘陵と相擁して、犀水の流域を作るりの寺町臺は、黒き色もて
彩ふん、静にして動かざる形を顯と。白露横る中を流るゝ水は、美妙ある樂と奏でつゝ、遠く西
に向ひて走り、わが佇む岸の邊の草叢には、蟲聲唧々として幽韻を送る。如何にたへにうるはし
き自然の姿なるよ。

そよ／＼と袂を拂ふ川風は、われを誘ひて深き思ひに迷はしめたり。

宇宙は廣く窮りあり。日月量辰の輝く處、これを天と呼び、人畜草木の繁茂する處、これを地と
名づく。漂然として天地の間に生れ出でたるわれは、こゝに深き疑に沈まざる能はざりき。われ
生れて茲に十有九年、花に狂ひ、月にあこがれ、世は幸多きものと思ひたり。だゝ現世の樂しく
喜ばしきを知る外、また更にわれを煩はすもれなく、過去を顧みず、未來を思ふことあふざり
き。されどされど、今にして思へば實に愚かりき。しかく現世は樂しきもの、過去の如何に、未來
は如何に。

美しき花より花に移り行くの蜂を見ずや。そが美しき翅をふるうて飛びありく様の、如何に愛
らしからずや。されど思へ、其懷は鋭き劍を陰し持てるにあらずや。美しき花を追ひありくは、

だ、甘き蜜を得んが爲めに、蜜の爲めに死をも恐れず、花びらを破るをも顧みざるなり。さうに思へ、言を飾り、容を偽り、たゞ功名富貴を得んことをのみ希ひ、そが爲には己の名譽をも捨て、更に人を傷けて顧みざる今の世の人は、恰もこの蜂に似たふや。かくても現世は樂しきか。世の幾多は少年少女、戀になやむと聞く、しうも彼等が戀は清きものに非ず、眞なるものにあらざるあり。彼等はたい、やがては土にねむるべき形骸の慾情を以て戀とをし、愛となす。げに彼等は偽れるの甚だしいものに非ずや。かくても猶現世は樂しきや。

若夫れ過去は如何に、未來は如何よ。茫漠として知るべからず。人は何處より來り、何處に去らんとするの。

また想ふ、人は何の爲めにこの世に來れるや。詩人は歌ひて曰く、雲閉ざす奥山の巖ののげより流れ出づる清水は、葉蔭に滴り木末を傳ひ、谿を流れ村をすぎ、或は早瀬となりて岩に咽び、或は深潭をなして緑の色をたいへ、或は懸崖千仞、鞆鞆の聲を發して直下をるも、すべて自らあれを知らざるあり。たゞに其流るゝ様のいかあるのを知らざるれみなならず、何の爲めに流れ出で、何處に向ひて流れ行くかをも知らざるあり。人も亦この流水の如く、何が爲めに生れ、何が爲めに生き、何處に去るのを知らずして、たゞ此世に來りては運命の翻弄するがまゝに動くのみ。現世の樂しめらざるを覺ゆるも、而うも過去や未來に對しての疑問は未だ解けず。われは長へにこの疑問を解き能はざるべきの。

夜は更け、月は冴え、わか思は更に深し。時しも如何なる人の奏づるにや、いとも妙なる琴の音

れ、かなたの蔭より夢の如く靜に洩れ來りて、ちやめるわれを慰むるが如く、わが胸は更に新しき感もて滿され、低首徘徊去るに忍びず。

漢文

李德裕論

村上 函 峯

唐室衰。而牛李朋黨之難起。論者謂。唐室之亡。由僧孺害德裕之功也。余以爲不然。德裕之罪。浮于僧孺也。何則以朋黨制朋黨。猶以妬夫制妬婦。徒相傾軋。而有害于國家耳。且德裕之所以排僧孺者。爲一身之邪。將爲國家之邪。苟爲國家。則不盡排異己者而可也。吾排之太過。疾之太深。謂吾君子之黨也。彼小人之黨也。不相容如冰炭。公道之外。又以私怨排之。則直道廢。而彼亦益欲報其怨。日夜幸吾一事之短。乘隙以發吾過。而從吾黨者。雖有可斥之罪。稱譽不遺餘力。益使彼得藉口。是助彼爲排吾之資也。卒之不特斥死于海上。由此天下之勢。亦瓦解矣。是唐室之治亂所大關也。任其責者。非德裕而誰。予故曰德裕之罪。浮于僧孺也。且夫唐室當此時。外則有藩鎮跋扈之患。內則有宦官蒙蔽之害。於此二患。鞠躬盡力。猶恐其不克濟。而况結黨而逞其私乎。一旦及德裕握文武之柄。已克濶濟。苟乘其勢。圖諸鎮。何難之有。諸鎮既平矣。公議勇斷。使如疾雷不及掩耳。則宦官亦易於薰鼠。其功不偉乎。而德裕計不出于茲。悍然排異己者。唯恐不亟。遂至殺身禍國。豈不悲哉。昔者廉頗城。藺相如之功。曰吾見相如必辱之。而相如能屈已以義相動。

遂爲刎頸之交。故秦靡敢加兵於趙者。殆二十餘年。德裕以唐室之名臣。而不及相如遠甚。豈不愧哉。凡人結朋。而排君子。謂之黨。君子結朋而排小人。謂之黨。結朋有別。而其爲黨則一也。至殺身禍國則已矣。嗚呼豈可不畏焉哉。

孟嘗君論

微子學人

孟嘗君之養士也。當時稱其賢。名聲重天下。而王荊公以爲雞鳴狗盜之雄。司馬溫公以爲奸人之雄。蘇長公亦刺其取士之陋。數公之論已定矣。自是之後。世多少孟嘗君。目其客以雞狗。何其冤哉。夫君長之急務。在求賢禮士。舉八元八凱。唐虞所以隆也。得亂臣十人。文武所以興也。故周公吐哺握髮。齊桓夙興設庭燎。能得賢士者。國治身安。不得賢士者。國亂身危。詩云濟濟多士。文王以寧。是之謂也。但戰國之時。王道陵遲。禮敦俗澆。世尚功利。而輕道德。人事奇變。以廢仁義。當是之時。嘉謨臯猷。若稷契皋陶。雄零遠圖。若伊傅太公者。其誰也。道德仁義之士。不可得者。時勢所使然也。何特尤孟嘗君乎。雖一藝一能之士。必收錄之。使各竭其才力。已憑其力。以保顯位。以全令名。不亦可乎。夫雞鳴狗盜之陋也。固矣。故初孟嘗君之列此二人於賓客。賓客盡羞之。而猶不棄之。收置下坐者。慮其有所用也。果賴其力。以脫虎口之危。孟嘗君之出關。孰與楚懷王之不反。韓退之有言。曰。玉札丹砂。赤箭青芝。牛溲馬勃。敗鼓之皮。俱收並蓄。待用無遺者。醫師之良也。君子之用人。亦宜如是。孟嘗君能用二客之能。豈可夢哉。且其門客成名者。何止二人乎。其最賢者有魏子馮驩。魏子與粟。以結賢者。賢者自到宮門。以明孟嘗君無反謀。馮驩燔券。以親薛民。薛民扶老携幼。以迎孟嘗君。其爲孟嘗君。樹德彰名多矣。若二子者。可不謂賢乎。論者掩其賢者。而揚其陋者。其言之不公平也可知矣。孟嘗君以賤妾之子。爲其父靖郭君所棄。而說其父。自主家事。遂得爲太子。而襲封于薛。其智略有大過人者矣。其聘于楚也。容公孫戊之諫。遂不受象牀。而不問其私得寶於外。求過用諫如此。雖比古之賢人君子。何慙之有。及其怨秦也。與韓魏攻之。入幽谷關。彊秦寒膽。割三城而求和。夫秦之疆暴。六國皆畏之。獻地卑辭。唯不及之恐。孰能爲此舉。孟嘗君雖執齊國之政。其所據者。唯區々薛城而已。六王之所難能。而一薛公獨能之。嗚呼壯哉。蓋亦養士之力也。當時稱其賢。名聲重天下者。豈其虛乎。孟嘗君實可謂戰國賢相矣。若夫怒趙人笑其眇小。卽滅一縣。函谷之役。聽蘇代之言。以廢大義。是賢者之過也。可惜矣夫。

太公垂釣圖贊

嶺

南

水清岸邃。磻溪之濱。黃髮鮒顏。靜言垂綸。非龍非虺。知者何人。一遭明主。投竿水滸。牧野膺揚。澤加生民。行藏變化。於乎何神。

竹筒瓶銘

不求難得。平易是貴。虛心潤節。僞家百卉。

硯銘

朝磨夕磨。親以爲友。日日記言。漸積如阜。雖剝如阜。誰傳不朽。且惟且羞。難比爾等。

筆管銘

大小併受。攢鋒參差。偏觀選奪。則得其宜。器不金玉。自有所資。

管敬仲贊

糾死不死。孰謂無恥。仁以為任。待舉于士。四維已張。政達遠邇。九合一匡。大勳何美。若微伊人。夏其夷矣。

日本刀記

冠木堂主人

日出瑞穗州。山秀水清。而正氣塞。凝為百練鐵。(評云開手自得體)在昔神聖肇邦基也。以天瓊矛裁制天下。斬滅妖魔。而皇祖傳祚之際。亦以神劍授天孫。天孫受以平天下。為加神器一位。刀劍之崇其如此。故神化之所及。舉世尙劍。威武為俗。是我邦之所以冠絕于宇內。而外夷無敢侮焉也。劍德之大可以想矣。日本刀之一脫室也。光鈿電閃。山川為震。鬼神為懼。其所觸悉殪。雖三軍貔貅。百萬虎狼。亦皆寸斷。嘗聞北條時宗用之。塵虜兵十萬。又聞豐公依之。躡蹂韓土。震駭明朝。日本刀之光威靈德。至此又倍熾也。雖然。天哉命哉。一朝當明治之革新。萬古不可動之寶刀終無用。爾來。歐雲蔽天。輕薄為風。米風捲地。妖氣慘澹。士氣為大衰。今也日本刀亦將生鏽於櫃中。蓋日本刀鏽蝕之時。則是吾邦元氣絕滅之時乎。豈可不慨哉。余也性愛劍。家藏新藤吾國光一刀。而拭磨不違時。為光鈿常閃々矣。他日會時運。攘歐雲米風。而斬殺佞官賊吏。以為下物。笑而酌酒。振興士氣。挽回士風。蓋亦大矣。聊有所感。作此記。(評云無限感慨)。

明石華陵評行文注々滔々可讀可誦

新體詩

雪 兔

紫 影

雪やこんく降れ小雪

夕の空の風さむく

南天ひろふ鵜も來ず

庭の飛石うくそまで

見るまにつもる面白さ

降つたくどたりたつて

砌に雪をひとにぎり

坊やが作る雪鬼

左右の眼は南天の

赤い眼玉や赤眼玉

ぱわや出來たと丸盆に

大事に載せてと見う見

笑みうたまけてうばが膝

明日は卯の花やらうよこ

獨合點に語りつゝ

しゃべり疲れてうつらく

夢はそのまゝ曉の

雪のあしたのうらくかに

朝日をばゆき床のなり

坊やは頭もちあげて

ばあややうべの鬼はと

尋ぬる盆のうたかたや

消えてはるなき雪解水

鼠やひさし白兔

二つ残りし赤き眼の

外には更に物もな

和歌

若葉五首

八波其月

訪ふ人の影だに見えずかりにけり庭は若葉の茂りくつて
幾千年ふりけむ柏年毎に若葉生ひ出づ心やさしも
花も見つ紅葉をも見つうはあれど若葉にいとしくものぢなき
たま／＼に若葉を洩るゝ一條の光から來ぬ池は真中に
若葉うげ小女の姿のつ見えて「青葉茂れる櫻井の里」

折にふれたる

夕されば瓢が池に鯉刎ねてしぶき涼しき夏は來にけり
犀川の水濁りせり蛙鳴く辰巳のあたり早苗とるらし

冬夜

桃

外

夜をふりみ月すむ大路人絶えて只枯柳風にちる見ゆ

浦千鳥

夕千鳥むらたつあたり雲たれて海面黒く時雨ふる也

冬朝

山茶花ようすき日さして鶉のすむ庭の寒くもある哉

鶉

夕ざれば峰の松風音絶えてわが庵近く鶉あくあり

山路霜

まーばうる賤の通ひし跡見えて霜かきわたす山の細道

俳句

紫

影

出水の川幅廣き新樹のふ
門内の梅の若葉や貸屋札
朝風に光る八つ手の若葉のち
水のへて藻を浮べけり金魚鉢
蛭浮ぶ溝川の芹老いにけり
薄暗き阿闍梨のゐまや白牡丹
綿拔よ蚤と虱のわうれかち

夏季雜吟

柳

露

酒屋あり赤き旗立つ柿若葉
朝月や緋鯉も浮いて燕子花

文苑

蝸牛は角を出しけり雨後の月
若竹に風起る山のけはひかち
繪日傘の石段のぼる二つかな
追ひつきて日傘と語る帽子るな
蚊帳越しに朝寝の君を起しけり

○

塵塚や霜たぐ下駄の古壘
吹く笛の沖に時雨るゝ汽船哉
夕日さを秋海棠や雨の露
勢田の宿三井の鐘きく霜夜哉
小春日を山門による乞食るな
難船の浦をしばちく千鳥るな
梅のさく一軒茶屋や春あさし
朝日さす殿新あり梅の花
十丈の瀧のしぶさや紅葉ちる
夕日さを納骨堂や秋の風
藪入や渡待つ間のしづ心

桃

外

春夏雜題

殘月や杉の黒谷ほととぎす
若葉ふるふ瀧のしぶさや不動尊
旅にして衣かへけり奈良の宿
高く飛ぶ雲雀映るや城の濠
もつれ絲ほとく媪や日の永き
踏切や女旗ふる青柳
易を読む隠士の窓や桐の花
藪陰に知らぬ小鳥や落椿

桃

外



雜報

校長交替

明治卅五年四月

第四高等學校長 北條時敬
任第二高等師範學校長

吉村寅太郎

任第四高等學校長

北條校長閣下の去る明治卅一年山口高等學校長より轉任せられてより銳意其の職に勉められしは今更に喋々を弄するの必要なし。我等は最も尊敬する北條校長閣下を送るの惜意を有するに同時に吉村新任校長閣下の來任を歓迎する者なり。

逢ふや柳因、別るゝや絮果。廣島に設けらるべき第二高等師範は此の最も適任ある北條校長を

迎へて國家教育の源泉を形成するに當り、我等は多年教育事業に經驗あり、識見ある新校長を得たり。新任吉村校長は但馬出石の出身にして嘗て第二高等學校の新設せらるゝや、擧げられてこれに校長となり拮据經營、漸く今の隆盛を來したりといふ。其後故ありて該校を辭し、東京に私立成女學校と起して女子教育の任に當り、令名風に曠々たる者ありしが。今や其の多年の經驗と高邁なる識見とをもたふして本校に臨まざる、必ずや瞞目して見るべきものあるは我等の信じて疑はざる所なり。聞く北條前校長は廣島第二高等師範設備の爲め直に上東して其の事に當らるゝと、第四高等學校長の重任より轉じて更に一層重大なる職責に當らるゝ、前校長は光榮

を祝し且つ國家の爲に自重を祈るは豈に我等子弟の私情のみかふんや。願れば北條前校長我が校に赴任せらるゝや風紀肅新、校規發揚、大に其れ面目を改めし者多々ありき。吉村新校長其の後をうけて任に當らる、我が校の規施設はより益面目を改めんり、我等は新校長閣下の來任を喜び之に向つて多大の希望を囑する者なり。

送別會に就て

學年將に終ふんとして、生徒扣所に卒業生送別會の廣告紙常に斷えず。私かに思ふ寧ろ是れ陳腐の事に屬せずやと

成る程高等學校三年の課程を了り所謂鹿鳴を歌ふて洛陽に上ふんする幾百の秀才、是を送り、是を慶するは、朋友の情固に然る所にして吾人も亦敢て黃吻を其間に挿まんとするものにあらず、唯今の所謂送別會あるものは徒に其の外形にのみ馳せて却て真情の流露を認むる能はざる

を惜む。「醉臥沙上君休笑、古來征戰幾人歸」。斯の如きは實に古昔送別の活畫圖、千秋の下なほ人をして猶淋漓たる感會を想見せしむるに足れり。夫れ塞外の胡、漠北の狄。樓蘭を斬らずんば歸らずてふ人生最高の情漲るの時、將た亦交通不便生きて再會の期を可ふざる程時にありては祖道の宴眞に興會禁ずる能はず、否斯る時みの境にあり、真情の流露止めんと欲するも得ざりしあるべし。而して今の時萬里比隣、况んや海内の狹をして、送別と叫ぶ、寧ろ友情相別つの感興まことに微かにして唯口食の會となりたるの滑稽なくんばあらず。

送別會、非か。非送別會、是か。送別會にして今の所謂送別會なるものならしめば吾人は斷々乎として其の全廢を望まんとす。多額の金錢は飲食の費に供せられ、長時のタイムは鄙野ある囁語に消ゆ。若し其れ滑稽れ甚しきに至りては

一面に識なき者累々として其の行に列る、爰に於ての眞にノンセンスに値すと謂ふ可きあり。吾人説あり請ふ述ぶるを得んか。曰く。

『若し眞に友を送るの情あらば、下宿屋樓上可なり、郊外可なり、林下可なり、丘坂の絶嶺最も可なり、希くは同人相座し豆を噛んで青雲を談ト、大に行を壯にせん焉』

再び禁酒令に就て

吾人嚮に我核禁酒令に就て言ふ所ありき、而して未だ其の反響の聞ゆるを怪む。頃者彼の所謂送別會あるもの頻々として料理屋、茶店、等に行はれ而して禁酒令の發布せられ居る第四高等學校の學生は盃を酌みて顧みざるあり、抑も是れ何の兆ぞ、果して是れ何の由來する所ぞ、吾人禁酒令の運命に惘然たるものおくんはあらず。奔湍衝き、激流飛ぶ、是を塞ぐこと固より尋常薄弱なる材料のよく爲すべきにあらず、是

れ識者の既に業に知る所、天下豈に之を知らざるに愚者あらんや。之をこれ知らずして徒に姑息手段を以て一時を糊塗せんか、其の結果は失敗に了らんのみ、愚や遂に及ぶ可らず。わはれ薄弱ある材料を以て激流を既倒に塞がんとするは笑ふべきかな。寧ろ其の源泉に溯りて之を鑿し之を關し大に力を爰に盡さんお若うざるなり。

頃者某生事を以て放校の不運に逢着せ。舊校長去りて新校長來り未だ座暖なるに違あらずして此の迅雷耳を掩ふに暇なき底の處分を見るに及びぬ。某生の此處分に至りしものは禁酒令に抵觸せし者なるか否か吾人其の詳細を聞かずとも道路の言を眞ならしめば該令に觸れしにあらざるが如し。而して其れ理由とする所は本校生徒たるの體面を毀損せりといふにあり、吾人は於てか人生不公平の嘆を三唱するを止むる能

はず。吾人某生にして眞個非行の所爲ありしもれぢらは一方其の非徳を攻撃痛論するを道とすると同時祭壇上に犠牲となりて屠ぐる、小羊の可憐に一掬の涙なきを得ざる者あり。人世固より不公平の嘆多く其の公平無私なる裁斷を得むこと常に稀ありと雖も、一は寛にして他は酷甚しきを見る時、いくで慨然其の責を問はずして黙す可きか。此の意味によりて幾度か鬭争は開かれ、統率者と被統率者との間に隙を生せし事は歴史の證明する所にあらずや。見よ幾百禁酒令犯者は累々として校中に充滿するに非ずや、多數の體面を損ふてふパチルスは揚々然として濶歩するに非ずや。可惜エッキス光線は克く物を隠れたるに透すの明あるも當局者手中の棘腕に利用せられず、憫殺最も値あるに非ずや。非か。

ある所あるが如し然りと雖も事實は是を證して餘あるを如何にせん。若し今の本校教育主義よしと否本校新任校長の大方針よしして世の所謂汶々者流を摸する者あらずば敢て謂ふの必要あしと雖も、本校新任校長は其れ主義に於て快斷を執らるゝと共大に現時教育の弊を對して意見を有せらるゝと聞く。嘗て校長は或る會場に於て大ホーム主義を發表せられたるを記憶す。大ホーム主義！如何に其の名の美且つ高あるや。嚴父の肅、慈母の愛相待て茲にスキートある家庭の和樂を望むを得ん。嚴なる父は其の家憲に違ふと云ふの故を以て其の子に規するに過分の勞働を強ふる酷を敢てするか、將だ小過を罰するに鞭打一撃起つ能はざるは慘を快とするの、吾人は慈母の愛を想ふ毎に春風の渡るが如く音樂の美妙に酔ふが如く未だ嘗て感謝の念を生ぜずんばあらず。

人生れて家庭の不調を見るは不幸裡の最大なる者。罪惡是より出で、憂患是より源を發し、其の害實に謂ふ可ぶざる者あるなり、怖れて而して慎まざる可けんや。

嗚呼家憲の或る者は名ありて實なく、之を犯すも責められず。而して或る家憲れ一を破りたる兒は直に鞭打の下に倒れぬ哀む可き哉。

星の夜半

世に森嚴幽大ある感懷を賦興する者抑も亦に多。月夜の景も、暗夜の趣も、若くは風雨あれすさふ夜半の風物か。月夜の景は人をして快美の感を起さしめ雄大の興を催ふさしむる者あるも中天に懸る皓月の姿致は遂に幽嚴の趣を牽く

よは餘りに露骨なり。而して黑暗々の夜、風雨の夜味の如き前者は大沈黙を表現したるに近くして天地を被ふ黒衣は吾等に光明を惜む者の如し。風雨の夜、壯はこれ有り、大は無きにあら

ず、慄然襟を正して畏敬の念を發せしむ。而も是等は遂に星斗燦爛、乾坤寥廓、人を幽殺し、嚴殺し、而して其の裡深大なる意味を賦興するの星の夜景に若かざるあり。

萬籟聲を收めて靜絶の氣、人を襲ふ時、仰て銀沙を撒けるに似たる大空を見よ。朗然として澄み渡れる大虚空には神秘のさゝやさあるを覺えん、或る者は金剛石の如く或者は金の如く、遠く近く錯落として瑠璃珠玉盤上に亂れ落ちて聲あるが如し。幽渺の大乾坤仰て其の深高の果て幾千萬丈なるを知らず、涇河の沙と宜ひし其の數はさながらに此の星の數多きにも譬ふべきか。

紛擾一日の煩騷を逃れ來て、暫く無限の大空の下、靜に心身を置いて胡思亂想を拭ひ去り、樹下石上、徐に靈氣を滿胸に占めんには、或は多大の靈韻を遙りなたる空より聽き、瞬きする星

は光は大宇宙に織られたる鍼言の如く我等れ心胸に讀まざるゝからん。

あはれ、深嚴幽大の趣を味はんと欲する人よ、もきて星の夜の情味に飽け、必ずや得る所物界擾々の者ならずして靈界の神秘を其の無象裡に認るを得べし。

道友會と福音會

此の二者は本校學生中宗教的信仰によりて成立せる團體なり。前者は佛教主義を其の基礎に置き後者は基督教にそが信仰を寄する者、少くとも本校内に於ける精神的結合あるは言を待たざるなり。二者各其の歴史と信仰とを異にす、而

も其の向上一路を仰て不測の宇宙に心靈を托し世に滋垢を蟬脱して以て靈的方面に遊ぶ者あるは一なり。是を譬へん、濁流滔々亂波驚浪此の岸を嘯み彼れ渚を浸す冥暗場裡、一道の清流尚ほ克く見るを得べきが如く、將た又愁雲疊々

の天に遙杳數點の星光未だ全く其れ影を失せざるに比せん。靈鷲山の法音、あたふ餘韻を存し、柑欖山の福音俗に汚るゝ時、此處金澤れ地、四高校裡に存する兩者の團體はまことに殊勝にも希望ある叫びなりや。我等大に兩會の會員諸卿に向て大なる希望と尊敬とを抱持せる者あり、事或は諸卿に向て難きを強ゆるの嫌あらんも、堂々たる練瓦校裡また我等の胸襟を披瀝して談ずる對手あらざるを如何にせん。希くは吾人をして少く諸卿に語らしむるを許せ。

道友會及び福音會の諸卿、諸卿は敬虔なる信念に頼りて此の濁流横々に漲る社會否學生社會に航路を執る者あり。夫れ驚風怒濤の間をきりて航するに當りて最も緊要とする所のものは、先づ船體の堅牢と勇敢ある氣象とに存すると等しく諸卿の期する所を現實にせんと欲せば必ずや第一要義としての熱心勇猛を欠く可ぶず、是れ

或は諸卿が既に業に知り且つ實行せざる、所をらん、而して吾等の此處に陳套の言を借り來りて今更に語る所以のモノ實に感ずる所尠かゞざればあり。

道友會に就きて言はんか、毎月の例會が某所々に開られ某高僧、某々の講義談話は誠に心靈修養に資する大ならん。然れども其の結果を驗せん、我等遂に嘆辭なきを得ず。福音會また之に類す、諸卿は毎週の祈禱會、毎日曜の説教に各自の教會に集りて讚美歌を唱ひ、祈禱を捧ぐるの儀式を有するれみ、是果して満足すべきの事か、我等遂に不満かゞざるを得ず。既に標して宗教的團體と云ふ、稱して心靈的結合と唱ふる以上は之に加味するに熱誠勇進を希はざる可らず。我等熱誠勇進と稱するも敢て夫の狂漢的動作を歎むるにあらず、希ふ所は今の所謂潮流に一種の波を揚げよと云ふにあり、言を換て

之を説けば滔々たる濁流漲る今の學生社會に不盡の燈臺となり、將た生ける命の泉を給與せよといふに存す、一種は原動力となりて其の主張を現實にせんを力め且つ之に盡すは誠に丈夫兒の快とする處なり、況んや基礎を不動の宗教に置き光明を暗中に認め、紛々たる世波に航する青年元氣に於てをや。

私に思ふ諸卿の元氣は萎靡振はざる久しきにあらざる。希くは我等の言を許せ。諸卿の所謂精神的團體と云ふ者、悉く是れ烏合れ衆にあらざるかき、我等疑かきを得ざるなり。昔は英國某大學々生の眇たる四五の團體ありき而も其の誠熱なる信仰と強固なる意志とは四邊の迫害嘲笑に動かず勇猛なる奮闘力に常々彼等四五の團體より流れ出る源泉とあり遂に當今教界一方の盛を呈するメソヂスト教會を興せりと、吾等之を聽て感慨常に縷々たるもれあり。江呼鳴東は

子弟八千を提げて江を渡りて西せし項籍の一隊は當時強秦の餘威に比すれば眞に比す可ぶざる者ありしと雖も奮然蹴起其の強き團結力は行く／＼兵を收め、遂に關を陥れて秦の山河を振撼したりき。若しそれ烏合の衆に至りては寧ろ是れかきに若かず、何となれば活動の第一歩先づ既に其の煩み堪へざればあり、諸卿之に聞くべきや否や。

道友會及び福音會の諸卿、我等今緣遠き彼の江東の子弟八千人を以て諸卿に議せり、是れ強ち牽強附會は論にあらず固に現今の社會は秦末當時に酷似する者あればなり。始皇鹿を失ふて社稷將に崩れんとするや天下の儒生を坑し天下の詩書百經を焚き以て天下の黔首を愚にせんと力めたるは、恰も我國急進の物質文明が全國を風靡して固有の道德を蹂躪し異端百出、過渡時代の常として國民道德の根柢に確乎たる信念なく

教育倫理の教條は其の餘りに乾燥なる故を以て毫も人心を統御するの力なく、世を擧げて滔々たる罪惡の淵に頓倒しつゝあるに比すべし。而して趙高李斯一輩の徒に不平を抱きて天下の豪傑耕鋤を投て起ち、暴秦の四方に劔戟の響えげかりしは、毒火炎々の裡、強劇なる魔醉劑に酔ひ崩れて漸く其の毒に苦みし現代社會の一隅微に信仰を求むる聲、陰々として響くに比す可ぶざや。酔ひしれたるドラムカーの覺醒を待たんは事餘りに愚に類す、寧ろ之に與ふるに一服の清涼劑を以てし世の迷朦を救ふて爰に敬虔なる信仰の旗幟の下、理想の樂園を形くるは是れ宗教を信する者の職務ならずや。諸卿を以て宗教家の職を強ゆ或は適切からず然れども綠蔭のある所、渴する旅人は趣く如く、諸卿が眞摯なる團結の下には少くとも餓えたるもれ渴きたる者相率ひて靈界のパンと水とを求めん、此の時

諸卿にして其れ之を欠かば彼等は空しく悶死せんのみ。彼の滔々たる濁流に凌辱する輩はパンと水とを欠ぐを自覺せざるに非ざるも醉眼朦朧未だ其を求むるを能くせず諸卿須らく之を救ふべき也。

我が親愛なる諸卿！、畏敬する諸卿！、諸卿今や踏蹴逡巡すべき秋にあらず。勇猛邁進以て江西に向て旗旌を樹てざる可らず。鉄鞭一揮ルビュンを渡らざる可らず。若し江を渡りて敵を撃つの勇あくんば寧ろ鐵をとりて疾く田畑に隠れんのみ、道友會、福音會にして生氣なく元氣なき鳥合の群に過ぎさくしめば寧ろ之を解散して其の名の實にそはざるを慚ぶべきなり。

我等の言まこと杞人杞憂に過ぎざるを知ると雖も、我等諸卿と深厚の縁あるもの、今の道友會、福音會の形況を見て感ずる所あり。敢て當らねども諸卿と志を同ふする者、豈に我等而已

ならんや。現時諸卿の旗色甚ぶ昂らずして世の二三子をして疑ふ其の間に挾ましめ、輕侮の眼を諸卿の牙營に送らしむるは是れ決して策の得たる者にあらずるあり。若し夫れ團結を強固にし、信念を修養するが如きは諸卿各其の計あらん豈に我等の黃口を許さんや幸に自重せよ。

少數の團結

吾等敢て彼の公認下宿制を排斥する者にあらずと雖も寧ろ兒童に等しきあからんか、小學ありの兒童を壓制的に之を寄宿舎につめ込むは策或は得たる者あらんも、鬚も生ひ初めたる六尺男が無意義ある公認下宿は無意義ある生活をおしつゝあふんには心ある者誰れか其の無意義あるに驚かざる者なからん。寧ろ同主義、同抱負の青年相集りて同宿し、相互の間に研磨切磋しつゝ互に相交りたふんには如何に樂しかる可きぞ。此れ意味に於て我等は道友會、福音會の如

き諸同人の一考を煩はさんとす。既に基督教に屬する或る一派の學生に此の組織ありと聞く、強固なる團結は此の如き裡に醗酵せらる。彼の三々塾の如き亦此種の理想による者か。敢て多數の負數を願はず唯意氣相投するの士、否同主義の青年相集りて極めて意味ある、眞摯なる生活を引き、各團結また相互に聯絡を通じ相提携し大同を以て少異を問はず着々其の事に従事せば固に現今學生社會否寧ろ本校健兒の面目を一新するに足らん。

『君拾後山之薪、吾汲前溪之水』。『寒嵐一夜、爐火之邊、同學五輩相談相論而徹夜、論始於人世而終於古聖賢之立々、危坐、躊躇、橫臥、片脚載於頰者、合掌勲慇低唱者、各是是將來之龍象也』這般の趣味は到底他の臆測を許さざる處、其現境にある人にして始めて咀嚼すべきなり。嗚呼下宿屋の二階徒らに小カイカラーを氣取る

多數の愚漢は不幸ある哉、遂に斯境の愉快を知らざる也。骨牌に夜を徹する者あり。圍碁に浮身を窶す者あり。然れども眞面目に生活の過程を経過する人はげに是れ曉天の星も雷もざるなり。嗚呼少數の團結、假令一團其の數は四五に過ぎざるも相聯絡し來りて中原の風雲を叱咤すれば庶幾くは一種の校風も發するを得ん。徒らに雜多の種を馳り集めて極めて得々、揚々然たる者に至りては我輩眞に其の意識の那邊に存するやを知る能はざるあり。千種の雜人種を陶冶して打つて一丸となす寔に快心の業あり、校風興る可く規律其の精を庶幾すべし。然りと雖も此の如きは其の統一者に於て一大手腕あるに非ざるよりは百年河清を待つと何んぞ擇ばん、恐くは是れ至難の事に屬を可し。寧ろ強固なる精神的團體を提起し來りホーム的趣味を以て之を養成し之を修養しゆかば却て捷徑に

らすとせんや。第四高等學校半千の健兒中、果して献身的かゝることも挺身之に盡すの丈夫ありやなりや、我等は必ず其の人あるを信じて疑はざる者なり。三峽の水も点滴の之を爲す所以あるを知らば、慨世の青年、有爲の健兒先づ自ら其の任を負ふて起たざる可らず。

夏期休業來れり

一歳めぐり來りて世は緑の時となりぬ。青山白雲かのがじ、優遊に任ずべき夏期休業は旬日の後に來らんとす、ホームの兒となるあり、草枕旅寢の宿に夢結ばん客もある可し。去りて南山の畔、緑水の邊希くは彼の所謂浩然れ氣を養成せんら、吾人此の時聊か語あり。

人は七旬の夏期休業を作りて學校生活に腦を使役する我等に與ふ、我等如何にして此の休暇を費すべきの。古人言あり曰く『百金を得るは易し唯是を如何にして使用するかは一の難事あり』

と我等斯の時に際し亦此れ嘆を發する事度々なりき。又曰く『大丈夫三日會はんば應に刮目して見るべし』と、我等の千語萬言以て胸中を語らざるや。三日固に僅少なる日數ありと雖も金鐵皆貫く底の意氣と覺悟とあふば是れ實に一場の放言にあらざるなり、況んや七旬の長時正に大々的刮目に値するの事をなすを得る眞に易々と云ふ而耳。暑を海山に避くる可は則ち可なりと雖も、彼の小セントルマンを學びて爲すこともなくして日時を費す如きは少くとも休暇を利用するは術に暗き者なり。優遊逸樂一年の學窓學び獲たる處を一夏の放逸に忘却し去るといふの滑稽は實に此の種の休暇消費法より生ずるもの眞に笑ふ可き至りなり。我等思へらく夏期休業は學校生活以外即ち教科書以外に自力を以て眞の知識を學ぶ可きの期ありと、言を換ふれば責

任なき方法を以て責任ある勉強を試みる可き最好機、是れ所謂七旬の夏期休業なるものに非ずや。

旅行可なり、海水浴可あり、山谷の跋涉可なり、讀書よし、相撲よし、要は身神兩全の秘訣を求め大に修養し大に活動の準備をすにあり、夏熱もと反て人れ意氣を銷沈せしむる實に大、加ふるに田園無聊の生活は忽ちにして小老翁の感化を被ふる事激甚、刺戟なく、痛痒なし、青年活潑の元氣を銷耗し盡して餘資なきに至らしむるもの多々、大に注意せざる可きざる者あり。

オー!!七旬の休暇、爾は何の資を以て我等に贈らんとするら、繪巻物に似たらん琵琶湖畔の水に、將た四明峯頭の餘霞を吸うて聽講の客とあり、而して舊都の綠蔭に友を尋ねて清遊を恣にし去りて南都の舊觀に奈良朝の美術畫幀を披見し、落花芳朝の四百八十寺は煙雨の裡に望む能

はずとも希くは如意輪堂の古扉に鏤痕を忍ぶを得んら、わ、是れ吾が今夏に期する豫望の片影なり。七旬の休暇!!、吾等爾に待つ所の者眞に多大、如何にして爾の寵幸を得べきの、希くは我等をして豫望に失する所あらしむるも尙能く、吳下の舊阿蒙たらしむる事勿れ。夏期休業來らんとす、自ら省みて爾に贖す。

歸省諸卿に托す

田園蚊やり火煙るホームは婦省する幸なる諸卿、我等は諸卿に托するに一事のあるあり。希くは田園歸臥の時を利用して、卿等より學窓に於て收め得し處を實用に供するにあり。少年會を組織し、青年俱樂部を興すは卿等れ敢て難んする所にあらざるべし、否之と新設せざるも之と類する者殆んど村裡驛亭あらざるなし、是等に於て小夏期講習會の講師たるは諸卿の任にして又卿等の責任(?)なり。地理を講し歴史を談じ以

て村家田園は趣味教育に資すべく、簡易なる讀書會、英語初步會を興して智識啓發の端緒を開くも可あり。是の如きは卿等學殖を利する大なるのみに止まらず必ずや將來社會に出で、活動するに一階梯たらん、人生趣味あり豈に學校生活中と云ふの故を以て田家村裡責任ある人世を辭するの理あらん聊か老婆心を以て諸卿に托す。

愚者を一掃せむ

今を去る事四百歳、マルブルヒに一大學設立せられ、當時博學の聞えありしドクトル、ヘルマン、ブッシは教授の一員として、こゝに聘せられぬ。彼、マルブルヒに着したる翌日、市街の様を見んとて、平生の服裝のまゝ、先づ市場に向ふ。彼思へらく市人は吾を知りて必ず尊敬せむと。然れども大學の設立を見ても喜ばざるマルブルヒの市民は、如何で彼が有名なるドクトルブッシなる事を知らむや、誰一人彼を顧みる者だに無

し。彼心平くならず、急ぎ家に歸り服を改め、盛装して再び市場に赴く。彼が豫想は空しくらず、市人悉く道を避け、脱帽以て敬意を表し、相顧みて彼は誰なるかと談る。ブッシ呆れて家に走り、其盛装を脱ぎ去り、これを脚下に踏み付け嘆じて曰く、汝美服よ、汝はドクトルブッシ、將また吾れ自身をそれなるべし。

マルブルヒ市民の愚、實に笑ふべきなり。然れども自身を顧みずして、人を笑ふ事勿れ。乞ふ少しく今日我邦人が如何に愚なるかを見よ。新流行と銘打ちたる華美の服裝をかし、念入れて頭髮を櫛り、塗るにコスメチックを用ひ、鼻下にはカイゼル風的美髯を蓄へ、鼻上の眼鏡、胸間の時計、總て黄金色のものを用ひ、身邊に得なぐの香を匂はすれば、其者の掏摸たるを、賭博者たるを問はず、すへてこれを紳士なりとして尊敬し、下にも置かぬ風にもて、身に着

けたる服は古び、頭髮鬚髯恰も亂蓬の如く、偶々のけたる眼鏡にして損所あり、時計の色白ければ、其人の聖賢たると、君子たることを問はず、皆これを常人と同視し、甚だしきは常人以下と看做して、之に對するに無禮の極を以てするは今日我邦人の有様に非ずや。あゝ何ぞマルブルヒの市民とえらばむ。

然れども吾人は信ず、我邦人として少しく事理を解する者は、豈に斯れ如き所業をかさむや、此れ愚をかすものは多く無智の徒に屬すと、計らざらざるは實に吾人の想像に過ぎずして、相當に學識ある青年の中にも亦此輩多しとは。帽

子の色は褪せ、服は腋は破れても頓着せず、靴は兵士用の古物まで満足し、至極質朴を守れば、彼等愚輩は直に嘲りてけらんばらと呼び、其事の寧ろ賞すべきを悟る無し。彼等は流石學問せる青年だけありて、談論する所によりて亦其人

物を高下せむと擬す。これ甚だ可あるが如く見ゆれども、其實然るに非ず。平生沈黙、夜々として學を勵む者を見ては、彼は蠢魚なり、俱に語るに足らずと誹る。若し夫れ、生嚙りの哲理を談し、當今の思想界の事に付きて吹く所あれば、彼等の畏敬を購ひ得る事易々ならむのみ。彼等は實際、沈黙寡言の何もれたるを、空談放語の何物たることに付きては識らざる也。愚も亦こゝに至りて甚しと言ふべし。

然れども彼等の愚や未だ大ありと謂ふべからず更に大あるものは、彼等愚者に對して自己の虚偽を飾らむと務むるもの也。彼等は愚者れ所謂紳士的に身を飾り、空談放語以て愚者を嚇し付け、首尾よく彼等の畏敬を買ひ得て得々たり。あゝ憫れならずや。由來青年は青年の本領あり。身に着くる衣服決して美なるを要せず、只清ければ足る、何を苦んで皮相の尊敬を受けんと欲

その。青年は修養の時代にある者あり、學ぶ所多しと雖も、要はたゞ將來活動の基礎を固むるにあるのみ。空談放語何れ益する所ぞ。

我校は最高學府乃豫備門あり。こゝに學ぶもの須く思想高大、行狀方正、勤學勉勵ならざるべからず。然るに頃者彼の愚者この極愚者との混ざるありて、累を他の正しき者に及ばさむとしつゝあるは、豈に慨嘆すべき極みからずや。吾人はこゝに親愛なる校友諸君の反省を促し、協力以て此弊風を一掃し盡さむと欲す。

良心ありや

滴々むばかりなる新緑に五月雨ふりそそぎて、いと物悲しき夕、我が親しき友は我が門を叩きぬ。彼は多るる我友の中にて最も眞面目なる人にして、彼が此性は却て人の嘲笑を招く事常なり。快談に時を移し將に去らむとして語を改めて彼は語る。我一日石浦町教會堂に演説を聞く、

其説く所は吾人青年にとりて甚ぶ有益あるものにして、聽衆等しく耳を傾け、滿坐爲めに靜蕭たり。演説終末に近ける時、我は何思ひけむ、

ふと席を立ちて家に歸れり。其夜我は樂しき夢に終日の苦を忘れむとて寢に就さけるの、やゝ暫くして我友來り、我を呼び起して某の席に誘ふ。席に至れば既に會する者五六、皆知面の士なり。やがて其の中一人、嚴に我に告げて曰く、汝何故に今日今の演説を聞き終らずして席を去りたるの。滿堂の靜蕭を破りたるは猶ほ怒すべきも、演説者に對して加へたる無禮に至りては、斷つて許すべきに非ず。吾徒此處に會して汝を呼び寄せたるは他にあらず、汝に刑を加へんと欲すれば也、汝速に其非を悔ひ、吾徒の拳下に伏せと。打てこの彼が號令に幾十枚鐵拳は我が頭上に下れり。我氣絶えて後事を知らず。忽ち我を呼ぶ聲に目覺むれば、我は依然昨夜の

床にあり。あゝかの慘劇は一場の夢なりしか、我茫然たる事良久しかりき。語り終るや、彼は恐れを追想して身震ひしぬ。

聞けよ校友諸君、諸君は此物語を聞きて如何に感ずるか。彼は惡意を以て演説の席を去るが如き無禮の徒にはあらず、然り彼は無禮の徒にあらざればこそ、彼が良心は斯の如くに彼を責めたるあれ。あゝ機敏なはずや良心の働。

敢て問ふ、諸君の良心は痲痺せるにあらずや、更に疑ふ、諸君果して良心を有するか。吾人を以て徒に壯語して快を貪る者とあす勿れ。若し吾人の言を疑ふ者あらば、去りて演説會や其他校友が會合する所に至り、具に觀察する所あれ。すべての會合れ席上に於て、立ちて自己の所見を述ぶる者ある時に、滿堂の者は靜蕭以てこれに耳を傾くるや。よし彼等が靜聽せる事ありと

も、そは實に稀有の事にして、演説の多くは騒

擾の中に埋没せられ終るに非ずや。彼等は演説の最中或は隣席の者と高らかに物語り、或は大開口開てあくびをなし、或は笑ふべからざる所に笑ひ、或は用も無きに靴音高く席を去り、甚だしきに至りては簡單々々と呼ぶ。彼等が拍手するは、説く者の意を稱讚するに非ずして、却ておれを嘲弄するに非ずや。斯の如くにて而

も彼等は恬として恥ぢず。これを見るものにて如何となす。これを以て通常の事とあすか、これをしも無禮ならずと言ふや。おれを以て通常の事となすは、其良心痲痺せるもの、言、おれを以て無禮なはずと稱するは、全然良心無き徒の痴語に非ずして何ぞ。

演説する者ある時は、これを靜聽せよとは、小學の兒童にも教ふる必要なき程の事にあらずや。吾人は今更諸君の經歷を説くざるも、諸君は既に其前額に北辰の徽章を輝かす者に非ずや、而し

て何ぞ此の醜態無禮をなし、而かも恥ぢざる。是に至りて吾人は實に、諸君は果して良心を有するや否やを疑はざらむと欲するも能はざる也。野に叫ぶ者は曰く、風紀廢頽し、道義滅裂す。若し彼等をしてひと度わが校友の實狀を見しめむの、彼等果して何と云はむ。

無題錄

(一)

何れの學校に於ても、其生徒間又幾多の會々組織せらるゝは同様ならんも、我校ほど多くの會の催さるゝものは恐くあらざるべし。勿論必要なき會は催されざるべきも、而かも其中八九が殆んど無意味に終るは甚だ遺憾に非ずや。

學生が學生らしくせざるべからざるは言を俟たざる事なるに、我校に於ける諸種の會が、會費として要求する金額は、少しく高きに過ぎて、學生に似合しうらぬ傾あるに非ざるか。而して

此不相當なる會費が、必要なる費途に當てらるゝかば不可あかるべきも、殆んど其全部が只飲食の料として使用せらるゝを見ては、大に其不可を唱へざる可からざるなり。而かも菓子を用ふるものは猶怒すべけんも、五拾錢前後の會費を徴して、西洋料理を味ひたる某級々會の如きに至りては、默過すべきに非ざる也。會に於て飲食物を用ふるは、單に御愛相に過ぎずして、これ無くとも會れ成立すべきは勿論なり。然るに級會の目的と誤り、學生の本分を忘れたるの甚だしき事斯の如きに至りては吾人何と云はん。

(二)

遠山は雪も跡なく消えて、緑なる野に、白紫の色とりとりなる小さき花の匂ふ頃となれば、北國の地として戸外の運動に適せずといふべからず。我が廣き校庭たゞ草の萌ゆるにまかせて、

庭球の外また戸外運動として見るべきもの表はれざるは何が故ぞ。六百の兒たゞ蠢々たるれみと評し去られんは、如何に口惜しからざるや。

微々として振はざる我が運動場裡に、獨り庭球の賑ふは喜ばしき事あれども、暫く其傍に立ちてこれを觀れば、吾人一言するの止むべからざるを覺ゆ。野球と危険なりと思考する人は、多く庭球に趨く。然れども若しかれ其技に拙ららんり、彼にして厚顔ならざる限りは、終日其傍に立つとも、一回の技をも試み能はざるべし。

これ、其技に熟するもの、或はよし未熟なりとも厚顔ある者によりて占有せらるゝを以て也。既に共有の具たる以上は、互に相譲りてこれを用ふべきは理の當然なり。然るに彼の輩は、擅にこれを占有するが如き態をそののみならず、未熟なる者に對しては、邪魔者扱ひをなす。これに至りては、厚顔あふざる尋常れ者、豈に共

に其場に立つに忍び得んや。うくの如くにして庭球場は、厚顔者流の占有物たり了らんとす。

牛言二則

○九十の春光まきに竭きかんとして俄然校長の更迭あり、嚴正剛直なる北條時敬先生去り給ひて茲に謹格真摯なる吉村新校長閣下の來蒞と迎ふ。吾人誠意以て新校長閣下に望む所多し。夫れ儻々として成るもれば成るに儻たり、決して成れるものにあらざるあり、儻々として敗るゝもの亦敗るゝに儻たり、もとより敗れたるものにあらざる也。而して迷亂は性々似儻の際に生ずとか、我々今日の境地は寔に儻々たる似儻の際に在るものに非ずや。曩きに北條校長その森嚴痛快ある一定の主義を把持し、以て我々校風紀の刷新改善につこめらるゝや、曠魅魍魎漸く其跡を絶ち、校紀の振肅大に面目を一新せるものありき。しうも校紀の振肅今や漸く成らむとし

て健兒徒々に狭小の天地に踞し、往者の意氣頓に衰へたるやの感あり、一利一害は物の免れざる數ありとするも、之れが後を襲きたる者、須らく這般の消息に三思する所ありるべからず。意氣の鎖沈衰耗はやがて青年の痲痺絶息すべき一階梯を踏むものなり、迷亂此に萌し、取亡亦此に従ふ。吾人切に新校長閣下の考慮に至囑して已まず、校長閣下幸に吾人の衷を諒とせよ。

○青年の意義ある、猶ほ器什の稜あるが如し、一朝青年に稜々の意義を缺らんか、實に青年の本領を失ひたるもの、彼は一片の木偶あり、彼は一基の蠢動せる位牌なり、青年茲に滅び、健兒茲に死す。先聖言あり曰く、觚不觚、觚哉、觚哉と。嗚呼是れ吾人青年の服膺とべき一大箴言に非ずや。吾人は再考三唱いよ、ますます斯言に深遠にして幽玄の感想涌くが如きを覺ゆる

也。しかはあれど今の所謂青年あるもの、木偶にあらずんば位牌たるもの、所在皆是れ也。今の青年に向つて斯言の趣味感興を説く、夫れ恐らくは石に向つて法を説くの類ならむか。嗚呼、天下真個の青年ありしや久し、而して今夫れ辰章校八百の健兒が意氣果して如何に。

○友あり、吾人を誥つて曰く、汝頃來切りに大言壯語を喜ぶ、大言壯語果して青年の青年たるべき真意義ありやと。友の言、何ぞ吾人を知らざるの甚しきや。吾人は決して彼の大言壯語を喜ぶものに非らず、また自ら這般愚狂の癡態をまねぶものに非らず。友よ幸よ安せよ、汝の謂ふところは汝自身の幻覺に過ぎざるのみ、汝偶吾人の所言を揣摩するに過ぎて、遂に大言壯語是れ彼奴が青年れ意氣なりと言ふところのものなりとして、意外の錯覺幻惑に迷ひしなごめ、然り吾人れ言は稍、生硬なりき、若し夫れ汝の

ために之を説かんの、青年の意氣は青年らしき所に存す、吾人の願ふところは青年の青年らしかむことあり。奇矯破格吾人に於て何かあむ、切齒扼腕吾人に於て何の要否、大言壯語悲歌慷慨遂に虎豹の轉たるを免れず、一警犬羊のそれと撰ぶ所なき也。(風馬牛)

紀念日茶話會記事

池水湛々として若葉の影を滲し花は艶として萬綠叢中に紅一点の趣を添ふ淡靄遠く林間にこもりて鳥は和風に囀り胡蝶漸く榮華の夢を破りて花れ行方を索む美あるかな天地浩氣の充つる所、來れり來れり四月十八日は、天殊に晴明おして風特に駘蕩たり式は八時に終りて梓弓の音頻りに、綱引の聲は城頭の松林を動かし野球の仕合は壯快凜として勇氣天地に溢る、而も頃日脾肉の嘆尙癒ゆるを得ず活氣益盛にして尙抑ふべくも見ゆるに惜い哉天徳院の鐘夕陽を北海の底

に沈めて金城遂に暮霞の幕中に消ぬ、公會堂の破鐘こゝに打つこと七、接踵陸續來り會する者無慮四百六十余、廣濶なる扣所も爲に一席れ餘地あるなし實に未曾有の盛會あり、吾人は杉森本間の兩教授を始め森岡上野竹村諸氏の盡力に對して茲に深く謝する所なるべからず頓て會は本間教授の口によりて開られ笠井氏一片の祝辭を述べ壇上の花笑を含みて諸々の氣堂に滿つ餘興の時既に至つて惜むべし劍士未だ會せず遂に森岡京次郎君立つて一場の滑稽演説を始む流石に本校唯一の雄辯家風容大に揚がる口吻一たび開られて圓轉滑脱洒落快活の妙は、あはれ聽衆の頤をはづり胆をつぶし臍をより腰を抜うすに至り笑袋忽にして破傷す拍手喝采の聲絶ゆる間なくアトク燈も爲に破顔し土瓶踊り湯呑絶倒す滑稽學の妙茲に至りて極れりといふべし、次で佐野先生は例の奇辯を弄せられ歡聲雷同の

内小壇を下らる、己にして會場は忽ち劍刃の巷
 化し森谷精一君が後鉢巻玉禱の立立勇亦壯
 り稻垣氏の吟詩四隅に鳴響きて劍士之應
 閃光空に輝き蛟龍雲に乗ずるの概あり何ぞ其妙
 技ある小野連三君亦劍を振ふて紫電をひらめか
 し忽にして高く忽にして低く体容顔骨熱力溢る
 ばかりなり衆亦拳を握りて感慨にうたる亦至
 れるもの歎二部の樂隊は常に嚶曉の音を絶たず
 して會は一層の景氣を添へたり、池田琵琶師が
 武藏野の妙音は所謂歡樂極まりて愛情多き内に
 終り忽ち美音朗々として夜の静を貫くもれあり
 満場聞として聲あく高低上下緩急の妙を極む是
 名高き園田が君の櫻狩の一節にてありし茶菓
 配せられて杉森教授れ流暢なる演舌は特に聴衆
 の喝采を博し熊田君の意想天外より落つる底れ
 手品は遽に二個の無足達摩と化し今村君の劍舞
 鏝口に水烟立ちのぼりて大魚波間に潑刺するの

勢あり堂内忽ち活氣を帯び倦氣忽ち消す加ふる
 に河原君れ朗吟懐々奮慨の音骨髓に徹するの感
 あり興益深くして時の移るゝ知らず月世界大に
 意向に投じて演者の得意益加はる茲に悲愴ある
 台湾人の曲はいよ／＼池田師れ技能をあらはせ
 り音聲天然の美を極むるにあらずといへどもし
 かも其節々句々熱誠にいでて忽ち急なるあり心
 神爲めに激し忽ち慘なるあり涙血胸に迫る白川
 の宮當年の意氣見るが如く接するが如く静寂と
 感慨の内に其長曲を終へて校歌長く寂寞の四隣
 を破り曉々の音は歡喜の聲と和して遂に此會の
 終を告ぐ時既に十時半萬籟方に睡に入り萬里雲
 晴れて北辰粲然これ紀念日を祝せりき(頑鉄生)

各部報告

演説討論部報告

曩きに討論會を開きて所謂四高辯士の獅吼虎嘯
 が、如何に滿校健兒れ意氣を動うしたるやは、

吾人の喋々を俟たずして既に公衆の認むる所な
 り討論會ありて未だ幾許ならず、更に三月一日
 を以て當部例會を至誠堂に開く、鬼の如き試験
 期日は旬餘日の間に迫りて一刻の價千金よりも
 重きとき、堂に集る者参々伍々、やがて時鐘一点
 を報して會する者猶數十に過ぎず、而して二点
 鐘、漸くにして聴衆場の八分を占む、乃ち部長
 本間教授先つ登壇して開會れ辭を陳ぶること
 例に依て例の如し、部長壇下るや矮小肥滿の
 一士悠然として壇上に起り、之を當日先鋒れ
 將武部欽一君とす、不幸、此日委員に己むを得
 ざる故障あり、一々辯者懸河の辯を拜聽して、
 精細に批評の筆を執るよと能はざりしは、吾人
 の校友諸君に對して大に謝する所なり、由て
 ばら演題と姓名とを左に列記して其責を塞ぐ、

人ノ吾ヲ惡ム時ニ 盛賢藏
 可憐の猿 八木利一郎
 暗殺の進歩 山川正治
 境遇の性格上に及ぶ影響 宮北篤治
 目的と手段 米澤清治
 夢物語 氣駕高次
 餘裕 小山永顯
 壽命 古道秀
 偶感 逢坂元吉郎
 内觀主義 富山智海
 雜感 土肥了介
 夕陽北海に落ちて辯士茲に悉く滿了しぬ、
 當日聴衆の數比較的多り、は吾人の大に多と
 する所也、而して當日出席れ辯士特に一年級に
 多きを占め、北辰演壇初陣の士も少なからざり
 しかば玉石混淆をさすまゝ、乃感ありき、唯一、

文明と日本の天職
 撒手懸崖絶後蘇

武部欽一
 笠井仁八

しかば玉石混淆をさすまゝ、乃感ありき、唯一、
 三年級中の親玉連の出演、意外に少かり、是は吾

れ人共に飽き足らぬ心地したり、

會後場を變へて更に當部茶話會を開く、北條校

館正(二同)、河村兼二郎(獨二)、
上野道故(三、三)

長亦臨席せられ、健兒互ふ臂を交へて快談縱横、
罵倒あり、讚美あり、笑聲あり、氣儘あり、大
に聞くべく、又笑ふべし、偶、演説稽古會開設
の議、會衆れ一部より出で、忽ち滿場の賛成と
なり、校長閣下亦大に之に賛同せられ、稽古會
開設れ議遂に確定す、爾來之を開くんとして遷

右終りて、ウォールフールド先生は、徒歩旅
行が如何に吾人に趣味を興ふるもれなるの、又
如何に吾人に向て健康上其他に有益なるもれな
るのを縷述せられ、最後にユンケル先生れ愉快
なる奏樂あり、四時半散會せり

延其機を失し、茲に委員の任期盡きて新委員の
任を見るに至る、吾人之を熱誠ある新委員諸氏
に囑して益、其成功を計るべし、諸子幸に之を
怒せよ。

當日は醫學部六角教室に於て午後二時開會する
筈ありしが、稀なる晴天ありし爲め、定刻に至
りしも、教師及委員等四五名出席し居りしのみ
にて、開會すること能はず、漸々二時半音樂會
の終るを待ちて開會するに至れり、然れども、

獨逸語學部報告

第二回例會 二月二十二日午後二時半物理教室
に於て開會す、聽衆僅に二十余名當日出演の諸
氏は、

和 日 岡(三、二)、野口政秀(同)、

ユンケル先生が前日來準備し置かれし講演等も、
聽衆少き爲止むを得ず次回に譲る事とされり、
りく本會が不振にして、辛ふじて開會するが如
き始末に至りしは、余等委員の不肖にして其措
置宜しきを得ざるの致す所、其責固より免る可

ふすと雖、亦會友諸君が本會を冷淡視するに由

一番本會の振興に意を注がれんことを、

らずんばある可らず、本會創立以來日猶淺くし
て、然も此悲運を見るに至るは豈に慨嘆の至あ
らず哉、本學年に入りてより開會すること僅に
二回、然るに其振はざるにかくの如し本會の
將來亦トすべきのみ、若し今にして之が振興の

本會は一學期二回開會する例あれども本學年は
種々障碍の爲終り開會れ期を失して僅に二回丈
開くことを得たるのみ乞ふ委員の怠慢を責むる
勿れ、

策を講ぜざれば廢滅の期、或は近きあふん、云

講演會、吾が獨逸語學部は單に辨舌の練習を専
すのみに止まらず、併せて文を講ずるの會を設

ふ者あり、徒々に貴重の光陰を費して獨文の暗
誦を聞くも何の益かあふんと、暗誦の法は固よ
り其宜きを得たるものならざらんも現今吾校獨
語の發達未だ幼稚にして他に途の取るべきあき
な如何せん、何ぞ是を以て光陰を徒費すると云
ふの理あらんや、云ふを止めよ、光陰を徒費と

けて、以て獨語の研究に輔くる所あらんことを
期せしが、今や期運既に熟し有志の賛同を得て
毎週一回本校獨文科諸先生に請ふて獨文の講義
を聴くものと、なれり(講本は第一高校講文會編
纂者)二月十四日第一回の講義を物理教室に
開き、中俣先生講演の勞を取られ、聽衆は百有餘
名にして堂に充ちたり、爾後五月十四日迄回を

とると、敢て問ふ論者果えて斯く光陰の貴ぶべ
きを知るり、本會れ盛衰は實に校友諸君の奮發
如何にあり、若し夫れ獨逸語が如何に現今の學
術界に貢獻する所大あるかを知らば希くは奮勵

重ぬること凡そ十一回中俣、山田、西田、中目、
森内、等の諸先生輪番に講演の勞を取られたり
しが、第四回頃よりして一回と聽衆の數減少

し終には十五名乃至二十余名とあるに至れり、余輩始めより聴衆の多うらんことを期せざりしが、第一回に於て物理室猶狹きを感じるの盛況に一驚を喫することにも、再び其減少の甚しきは一驚せざるを得ざりしあり、何ぞ始に斯く盛にして後に斯く振はざる、余輩實に其解答に苦む、苟も事をなさんとするには熱心と忍耐を以てせざるべからず、希くは吾會員諸君よ、一層の忍耐と一層の熱心を以て本會の目的を達せしめられんことを、

正誤

前號察報中、時寮習第二回茶話會記事と題する項に於て

含秀揚秀 とあるは 含芳揚秀 の誤植なり

端艇競漕會

五月四日、大野川に我校端艇競漕會を開く、い

つに引かへて日本晴れなる天氣もうれしく、曉星猶ほ小松原の露にゆふぐ頃より、滿校の健兒が我も我もと、或は鐵道馬車ふ、或は徒歩に校歌など聲高うかに歌ひつゝ、手に唾一腕をきでけふの勝みな我になど、大野川さして急ぎ行くも勇まし。

大野上流には花やかに色どつれたる幾百の旌旗の、高く潮風になびきつゝ、約五百の健兒、垂千の來賓觀客を打つゝむ、賞品席、來賓席、乗艇者準備場、審判席、樂隊席などの諸設備も隅なく行き渡りて、午前九時といふに、暉々たる朝暉に金波洋々たる大野川の水は、一發の砲聲と共に先づ健兒のオールに打攪されつゝ、清き奏樂と共に競漕は始まりぬ。

競漕數は前後通つて廿六回、内十四回までは航路六百メートル、以後廿六回までは航路八百メートルあり、コースは南岸より數へて、第一、

第二、第三の三コースありて、乗艇菅原、瑞穂、敷島、各抽籤を以て競争毎に其コースを撰ぶ、今競漕中にて花々敷かりしもれ二三を述べんに、第十一回混合競争は白艇が三分十四秒を以て、拍手の裡に青赤を抜きは目覺しく、第十二回寄宿生對通學生の對抗競争に、通學生が、三分四秒を以て寄宿生を泡ふうせたるは心地よくもや、第十四回は職員競争ありき、美髯嚴容の諸先生が、平素教室内の恐ろしきにも宵玉はず、今は赤裸々、衆生に伍して、赤青等の競漕衣に、レスキヤップ召し玉ひ、ナヨクとメン以外何物ももち慣れ玉はぬや腕に、オールうざり玉ひしは、その昔、櫻うざせし殿上人の、あらくれたる武士の中に、立ちまどりて戦ひ一様はかくやと思はれてたか、中侯、佐野両先生のコックスタリし赤白兩艇は、見事勝を中野先生の

意にやを髯あでおろしつゝ、艇員中目、本間、山瀬、日下、森内、山田の諸先生と拉して、會長は前にメタル受け玉ひし姿をみては滿場思はず、拍手歡呼しぬ、第十九回の來賓競争は、福見、宮川兩氏かコックスとして率ひられし醫專校諸君の競争あり、宮川氏指揮の白艇は四分四十五秒を以て、福見氏の赤艇を破りぬ、濱邊、河原、高田、竹田、田口、高瀬の諸君凱旋の榮を負へり第廿三回縣立學校選手競争は、普通者少く、僅に第一中學校選手諸氏のみなりしを以て何となく、柏子抜けの心地せられき、これにては競争成立たざとて、本校有志者より一艇を組み之に應戦したりしも、本校の隊は鳥合の隊なりし結果、勝は麗はまき一中校諸氏の手に落ちぬ、

第廿六回、これぞ本日の華、此競漕會の中堅、

會て風雨にけしくづりて、一二月も以前より身に重大の任、至大の榮を負ふて練習の上に練習を加へたる各部代表の撰手競争なり、其榮あり、責重き各部チャンピオン諸子は實に、

赤 (一部)

。佐和 貞伯、増田 俊一、石塚 正二、里見 寛二、西野勇喜智、園田 三郎、石井 光雄、

白 (二部)

。三橋 篤敬、稻垣 米門、安部 成廉、堀 將之、東郷 外八、河原 繁、小野 連三、

青 (三部)

。竹内 琢磨、高安 慎一、野口 政秀、小倉 文彦、吉田 昌治、藤田孝四郎、高松 静、

姓名の左肩に○印あるはコックス也

の健男兒にて、何れも意氣軒昂、勇氣淋漓、何

劣るまどき装ひに、満場鳴を静めて、席を立ち舷に首さしはべて、今や〜と競漕をまつ、しうもふれ、見物人の責任なき心事のみ、責重き撰手諸子が心事に至りては、爾々輕々敷ものたふむ、終にオール撰擇につき、二部撰手諸子は舊製のオールを用ゐんと主張し、一部三部は共に新製のオールを用ゐんと主張し、こゝに之たなく紛擾する三四十分、漸く會長の裁決により、相和解して心よく新調のオールを使用することに決し、青艇白艇赤艇共に亦揃ふて、いさぎよく一打を大野川にあびせうけ、心地よき夕風に旗手あひひら〜、エイヤ〜と漕ぎ出せしは正に夕陽地平線三尺に沈み、暮靄滿江とさす頃なりき、忽ち見る、中流浪を蹴破り、水を搏つの蛟龍之、一は赤、一は青、一は白、疾駛す一塊の明玉を目して相争ひ相排み、猛突直

進、精を蒐め、英を淬して疾駛す、勝果して何れぞ!.....環堵汗し、満場どよめけり、俄然!!

中流二百メートル所、白赤の二龍は相搏てり、青龍之に乗つて二龍を抜かんぞす、白龍即ち路を轉つて青龍の後を廻り、更に鋒を轉つて争むとす、噫、漁夫の利の金言空からず、二龍の争は青龍の利となり、青龍は四分七秒を以て終に明玉と捕ふ、観睹の中、怒るあり、笑ふあり、喜ぶあり、かふしむあり、舷を打ち、櫂を打つて叫號を、嗚呼本年競漕會の榮は終に三部撰手諸子の手に落ちし也、三部生諸君の得意思ふべき也。

無事終を告げぬ、勇み返るあり、打しよけて返るあり、三々五々、相語り相談して去りぬ、その勝ちたる諸子の心やいかに、まけたる人の心やいかに。(終)

夕靄遠く、俱利伽羅、寶達の峯を立こめて、大野川畔風寒み、飛び交ふ鳥の拊急ぐに、満目しは肅條をそへつ、七時と云ふに本日の競漕會は



寮 報

時習寮春季大茶話會記

弦を離れたるタイムの征矢の的に立し人の心の面白さよ、今日を昨日と束の間の瞬時を、疇昔の夢に數へて、世は又爰に瑞祥の氣、松篁の緑に滿つ壬寅の歳は迎へられぬ。

六花霏々たる羈旅のまゝとむにさへ、自かかふる心地せらるゝを、況や家郷の團樂に、改曆の樂みと、飽りぬばかりに貪りたる友の身の羨ましきりか

かくて休暇は名残もつきて、寮の春は一入暖たらく、机上の研精澁々たる裡に、時習寮春季茶話大會の盛筵は開るれんとす

一月十一日、客窓の夢未だ全からずして、隙漏る風の折々に、葉摺の雪、戸近く、づるゝ氣

しは舎監始め寮生一同の感謝する所あり云々と、次で舎監西田先生は本寮在來の面目と、本日の會合に就きて所感を丁寧反覆せらるゝ所ありたり、次で校長はたちて、頃日に於ける本寮の進歩、即ち其の内部の整頓に伴ふ精神的の感化は多大の功績を擧げ、益々増進せんとする傾向を呈するに至れるは、最も喜ぶべき現象にして、勉めて之れが發達を期し近々寮舎の増築せらるゝに至つては、専ら本寮之が模範たらざるべからず云々と、次で杉森先生は平易なる引證のもとに、人の世に處するや、反つて其の特長とする處に蹉跌して、大なる失敗を招くもれなり、即ち吾人は圓滿なる發達を求むるよこの難さと共に、聽てこの結果に拘束せらるゝを免れず云々と、明晰なる論旨は、全く吾人が頂門の一針なり、次で、笠井君は例の快活ある辨舌を睥して降壇し、森岡君は第六公認下宿を代表して周匝

生の曉に徹して、今日爰に記憶すべき日は風あき雪の朝と晴れ渡りぬ、かねては無聲堂に開かるゝ筈ありしを、生憎寒稽古れたために、手狭きながら食堂を以て、會場にあてぬ、雲脚早き冬の日の、名残の色を金城の松にらすめて、晚鴉の群を眺み近く送る頃、漸く開會の時は近きぬ、忙裡の閑に、委員が手配したる會場の裝置は間然する所なき迄よ整ひ、聽て時鐘の五時を點ずるや晚餐の饗應は開られぬ、唯見る燈光影暗さあたりを迷ひ、幔幕の色鮮やかある處、主客胸襟を開きて和氣の霽然たるを覺えぬ、かくて晚餐後、少時を経て、今は純然たる茶話會に移りぬ、歡喜の聲破るゝ計りの喝采に迎えられる、中田君は寮委員を代表し、緊節ある口調もて一場の挨拶を試みぬ、要は本日例によりて本寮の茶話會を開會するに當り、校長始め諸教授併て寮友の熱心ある賛同を忝くしかゝる盛會に赴き

ある挨拶を試み、醫專校の土田君は結核バナルスに就きて滔々數千言、所謂一人舞臺の伎を演したり、永井先生は責任を重せよて前提のものと、先生が特意に能辨を振はれ、佐野先生は本寮既往現在の狀況に就きて所見を餘蘊なく披瀝せられ、尙嘗て寮生たりし茨木先生が今回英國に留學せらるゝに就き、既往現在の寮生に代りて、茲に之の光榮を賀するの意を表し尙健全に遣外の光榮を全うして歸朝せられんよとを祈る云々と、悠々迫らざる間に、その所説を終られしは尤も吾人が意を得たるものあり、次で破るゝ計りの拍手と共に、演壇は茨木先生を迎へぬ、先生は來二月の初旬、特命により、多大に榮譽を擔うて英國に留學せられんとす、今や將に衆目環視の間にその沈着ある態度を整へられたり、吾人は先づ留別は情に驅られて、緒情の自から平らかならざるものあり、一座亦肅

然たり、先生は離別の紀念てふ問題につきて、先づ泰西の風習より説き來り、延いて物質的事物の形式に留るよりは、寧ろ進んで精神的に永劫不滅の紀念を吾人々心底に彫銘するの優るに若かずと、嗚呼この言、移して以て長へに先生が紀念の座右銘となさんか、

かくて演壇の變遷送迎に違なき間に、人は舌頭吐伎ま酔ひ、所論の神に彷徨せり、時は刻んで餘興の期は追りぬ、一座色めき渡りて、喝采の聲さながら耳を聳せん斗りあり、俄然、唳々たる奏樂は、濃厚れ大氣に、靈妙の波動を傳へて「君が代」を奏し終るゝ、次で破るゝばうりの拍手は再び起れり、と見れば好箇の壯士は、劍を按んとてたたり、三尺の紫電空に躍りて、龍奮虎鬪の技を誇るものは加藤君、吟聲れ餘韻を引きて深く聽者の知覺を恣にするものは下野君なり、これをこれ本日序幕、つぎて顯はれし

狂言浮世床は、如何に觀者の喝采を以て迎へられよ、演者は山岸君、中田君、森君、眞面目くさりて風姿自かゝ人の頤をこく處、演伎れ動作は自然に出で、縦横壇上を手狭さまでに立ち働かれたる手腕は、唯アッ云ふの外なし、殊に其の筋書の卑陋に落ち入りざりしは最も吾人れ喜ぶ所あり、ゐくてまた舞臺は和氣の靄然たる春を送りて、肅颯たる秋の氣を迎へたり、園田君は端然として席を進めぬ、演ずる所の琵琶歌「七柳落」、闐然たる一堂、今や大絃小絃一時に湧きて、盤上珠を轉ずるが如き音調の抑揚は、凜乎たる悲愴の情と共に、演者も聽者も須臾の技神に迫りて、曲の終るを覺えざりき、次で神保君は輕妙ある手品を睨して一場の花を添へ、この間絶えず寄宿獨得の奏樂と福引とは、觀衆をして倦まざりぬ、興は益々進みて伊藤君の劍舞は始まりぬ、城山々頭老西郷が末路の悲

劇は、充分君が手腕により發揮せられて遺憾なし、つぎて三人片具の狂言に移りぬ、演者は野

り、幾多の活劇は斯くの如くにして、爰も全く餘興の終りを告げぬ、

田君、生井君、石田君、大津君、いづれも、その性格を摸し得たる風彩は、眞んに抱腹絶倒の極み、雜然たる一座、輾轉の裡に奇趣を生ト來る處、またもや破るゝばかりの喝采は堂の外にくづれぬ、次で龜川君の舞踏ありて、聽て當日の呼び物なる月世界は催されぬ、觀衆と舞臺との間には、一張の幕を垂れて之れを遮ぎれり、湧かか如き會場も闇の手に葬られて、觀衆の視線は、悉く幕の中央に集まれり、針大の間隙を漏れ來る光線は次第に球形の映象を増加し終つて、一帶の白布は、臙ろげに咫尺を辨ざる迄に至りぬ、再び奏樂の音につれて、之れみ映し來る形象は、各自に活動して、無言ながらの舉手

即ち寮生一同は立つて寮歌を一唱し、更に時習寮萬歳、茨木先生萬歳の聲は、異口同音に相和し、歡乎搖曳の裡に來會者は寮を辭しぬ、北斗欄干たるあたり人の世の夢は圓かに、之れを繞りて死せるが如き天籟の、折しも一しきり杉の木立に音たて、吾人の耳に時の更けたるを囁やけり、

あたり拍手のそれは、さかか急霰をあざむけ



附

錄

附 録

明治卅四年中増加書目

洋籍の部

第一門 哲 學 類

クローネ フヒツセル	近世哲學史 四卷五卷	カント	アイスレル	認識論
アベナリユス	純經驗ノ批判		アイスレル	心理初歩
オイケン	偉人ノ人生觀		シャープ	道徳ニ於ル美ノ要素
チエレル	希臘哲學史要		アヒリス	倫 理
ハルトマン	フレイソフヒエ、デル、ウンペウステン		フェスロン	女子教育論
エルサレム	哲學入門		ラアルトニール	教育論
チーヘン	心理生理的認識論		ギーヘルト	教育者資格論
スタンレイ	心理初歩		ヒユーム	自然宗教論
リンドチル	實驗心理學教科書		ハルフオア	信仰論
スタウト	分析心理		ハーゼ	基督教會史
ツルバル	實驗心理		チャーレ	宗教史要
			ブライデレル	宗教哲學
			同	宗教哲學史
			ブレレル	希臘神話
			全	羅馬神話
			マイエル	日耳曼神話
				第廿世紀新約全書

ラング

近世神話

カピタン

法學入門

チーグレル

フリードリヒニーチエ論

デルンベルヒ

パンデクテン

第二門

社會學類

風俗及神話

ラバンド

獨逸民事訴訟法正文
獨逸國法

ラング

經濟讀本

エンデマン

民法

マートラン

理財

イーリング

權利ノ目的

アライス

通貨論

一九〇一年政治年鑑
一九〇二年政治年鑑

ユッサ

理財初歩

第三門

歷史類

ニッチー

人口及社會組織

合衆國關稅沿革

アリソン

近世史摘要

タウシツグ

富及進歩

ホフマイヤ及
ヘリンク

歷史科教授參考書

グントン

羅馬法綱要

ブエール、クレンツト及
トロイベル

歷史教科書

ブーム

獨逸憲法正文

アンドリュウ

ビスマールクノ紀念

獨逸刑法正文

シユウイル

近世歐洲ノ歷史的發達

獨逸刑事訴訟法正文

グラント

近世歐洲史

獨逸商法正文

カルデコット

ベリタリス時代ノ希臘
英國殖民及帝國

穂積陳重

祖先崇拜ト日本法

バムベルグ

巴里條約ヨリ伯林條約間東方史

セーニヨボ

文明史要

ギンドレー

高等學校用萬國史

ステッド

レスト、ウィ、フオーゲット

マイエル
アルタロフト
及メーソン

羅馬史 卷一ヨリ卷四

地質局

百萬分ノ一帝國圖

リース

萬國史 卷一、卷二

グライアント

ピクチュレスク、アメリカ

ハインチエ

教師用萬國史

ウキリヤムス

中國總論

富山房

傳記讀本

フック

韃靼支那西藏旅行紀

ブルタルヒ

比較傳記

ペーテル

日本漫游者案内

ホスメル

猶太人

ヘルブスト

古代史辭典

スタンレー
レインブール

西班牙ノムール人

ウエーベル

近世史辭典

バムベリー

匈牙利

第四門

數・學類

ギルマン

サラセン人

チットー

代數

ロージャース

和蘭

マイエルス

置換論

ベンジャミン

波斯

ライ

誤差論

フツグ及
ステッド

瑞西

クライン

函數論

ステツエフンス

葡萄牙

トバンスタア

楕圓係函數論

ワツツ

西班牙

ハルクチス及
モトレー

函數論

サベール
ランドール

支那ト同盟軍

レサーチス、インゼ、
カルクユラス
オフ、パリエーション

レサーチス、インゼ、
カルクユラス
オフ、パリエーション

カムブリ

數學初歩

化學

デ、モルガン

數學研究法

分析化學摘要

第五門

理學類

第六門

博物學類

マハ

器械學

金石學

リーケ

實驗物理教科書

重要金石及岩石

ペトニッツ

通俗物理教科書

ゼ、ミネラル、インダストリー

コーレルト

物理問答

技 術 類

ホフキンス

實驗科學

ゼ、ララルプロブレム、オフ、シエード

ラフ及ページ

醫學生用化學

グラフィック スタチック

ライロレル著
カックレー譯

フビシカルケミストリー

メカニカル、ムーブメント

シヨース

無機定性分析

圓字体習字帳

シヨーンズ

實地化學初歩

幾何書法教科書

ラツサーコン

實驗室用有機化學

測 量

ラムゼー

大氣ノ瓦斯

タケオメートル測量

コムヌー

無機化學溶解字典

齒車ノ齒

ニユース

化學實驗

マシン デザイン

ペルトロー

破裂藥

器械畫

ラフ子ストル及
リヒテンベルグ

歐洲繪畫 ルーフルノ部

ヒル

ゼ、フハガンデーシオン オフ
レトリック

リユーブケ

美術史

島文次郎

涅氏邦文英文典 正編、後編
續編

第八門

文 學 類

ネスフールド

イギオム エンド グラムマー

ラスキン

セレクトト、ストリエツツ

同

イージャーバアシンク エンド アナリシス

パーク

セザメ エンド リリース

荒木和一

英和俗語話法

スマイルス

セレクトト、スピーチス、エンド レタース

ヘールス

英詩集

ラポック

カラクター

ビクトルユーゴ

ノートルダム

ビユーエレル

プレシユア、ラフ、ライフ

ベサント

オールドソートメント コンパシヨンス
オフ、メン

安井安吉

英文典エキセルサイス

マリヤット

ミストルミッド シップマン、イージャー

シャーロット
プロント

中學英語散文讀本

ステルン

全 集

上田敏

ゼ、ビクトリアン、ライル

ブルーク

古代英文學史

新渡戸稻造

テニソン、ラスキン、ブラウ ニンガ

ゴッス

十八世紀文學史

リツナー

ケンチング、オン、イン、セ

セイנטツプリー

十九世紀文學史

マツシユース

ウオーールド

同

エリザベス王朝文學史

デニング

アンジロ シヤバニスリーダ 第一

クーパー

書翰拔萃

丸善

コリヤ英文學史拔萃

同

コーザンク イン モダン フローズ

蘇格蘭大學演説

二大發見者

アチクドート、オフ、ヒューマニター
シヤイニング、エキザムブルス、フオア、
ボーイス

アメニチース、オフ、リテンチユア

キユーリオシチース、オフ、リテレチユア
リテラリーキヤラクター オフメン、オ
フシニヤス
カラミチース、エンド、コワレルス、オフ
ホーソース

詩集

アンクル トムス キヤピン

パイオグラヒカル、ストリース

ストリース、フオア、ヤンクローブル

ゲユーベニール、ストリース 卷一
モーラル、レツセンス、 卷二

失樂園 ドーレ挿畫

イン、ゴーストリー、ジヤパン

コ、ロ

ガリーニングス、イン、
プダフロールド

ユーマ

自傳

エキソチックス、エンド、
レトロスベクチーブス

ジヤパニス、ミスセラニイ

シヤドローイングス

ゲ、ドイチエン、フオルクスプツヘル

獨逸前置詞使用法

祖母ノ談話

武士道 習文

ゲーテ傳及著作

抒情詩 ショーニング第十六

ハムブルヒ劇 同第二十

自傳 同第廿一

詩抄 同第廿二

ナータンデルワイゼ 同第廿四

習字手本

ヘルン

マツタス
ミユーレル

ヘルン

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

三谷金女三

同

ゴア

リユーベン

ケーテ

マツチアス

パレスケ

クライスト

ウーランド

ゲーテ及
シルレル

ケルチル

ヘンゼ

シユミツツ

シツフェルス

リヒテル

ギユンテル

シユレル

獨逸文典

讀本

ゼルマン、サイエンスリーダ

詩文傑作集

フハオスト シユレル註釋

スブラハレーベン ウンド、スブラハシ
エーテン

シルレル傳及著作

フソードリヒ、フオン、ホムアルヒ

シユワーベン侯、エルンスト

詩集拔萃

ツリーニイ

獨逸模範詩集 シエーニング
増加ノニ

獨立戰爭詩人 同 第二

祖國詩歌集 同 第三

獨逸諺集

文法掛圖

獨逸文學史

シルレル

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

ロイベル、ドンチエル註釋 第五及六

カハール、ウツド、リーベ 同上

ミンナナオン、バルンヘルム 同上

エミリヤ、ガロツチ 同上

ナータン、デル、ワイゼ 同上

ワーレン、スタイン 同上

マリヤ、スツアルト 同上

ユンクフラウ、フオン、チルレア 同上

ブラウト、フオン、メシナ 同上

ウイカヘルム、テル 同上

作文例題

傑作集

自然ノ美

通俗讀本

エミール拔萃

詩文讀本

市民讀本

トルストイ 傑作集

大川信次郎

露話 文法詳解

フハダー 十九世紀文學

グレーボフ

露西亞文法

ドメーストール 全集

市川

獨譯 方丈記

フエスロン 死人問答

第九門

辭書類

ラ、マルチン プルミエールメヂテーション

ゼ、センチエリー、ジクシヨナリー

ドーデー シヤック

野村泰介等

佛和新辭典

ラ、ブルエール 性格論

中澤澄男等

佛和辭典

岡崎 日本文學史

谷口秀太郎等

獨和新辭典

サウエル 以太利會話文典

高木甚平等

獨和新辭典

デルブリエック 言語學初歩

島田豊等

學生用和英字典

ミステリ 重ナル國語ノ特徴

クリフトン

佛英英佛辭典

マクミラン出版 羅甸ユース 第二

ザンテル

同義辭典

マックスミューレル 言語學

クルーゲ

獨逸辭典

エーマン 獨譯百人一首

チャムバー

英辭書

エーマン 日本諺集 獨譯

ブアン

實用辭典

マックスミューレル ラースト エッセース 第一

ムレット

獨英辭典

ボステット 比較文學

サングア

新英和辭典

イーストレーキ 大森俊二等 登張信一郎 等

英和新辭彙 新和獨辭書

ビルン 十九世紀ニ於ル發明ノ進歩 (洋籍ノ部終)

高須治輔

露和袖珍字彙

ムーレー コムパニオン ジクシヨナリー

和漢書譯書之部

マイエル 會話辭典

第一門 哲學類

メンシユ 文學會話辭典

井上哲次郎 日本陽明學派ノ哲學

デンチルト フオルグス ヴニバーサル レキシコン

哲學叢書 第二卷 第二集

第十門 雜書類

皇清經解

植物學年報 卅五卷

皇清經解續篇

ネーテユア 六一卷六二卷

孝經衍義

ケミカル ニウス 八一卷八二卷

論語彙纂

エンシ ニーリング 下 一九〇〇年

韓非子全書

ヒンリヒ 圖書四半年報 一九〇〇年

諸子彙函

獨逸書入新聞 一九〇〇年

莊子雪

評論ノ評論 一九〇〇年

普通心理學講義

中外英字新聞 第七卷

ヘフデング氏心理學

普通ノ誤解 第八卷

論理學講義

ドル

中島力造

附 錄

井上哲次郎等 日本倫理彙編 卷一

湯本武古比等 日本倫理史稿

藤井健次郎 倫理撮要

澤柳政太郎等 格普通教育學

陳師節 祖庭事苑

佛遺教經節要

天台四教義集注

鈴木正三 破吉利支丹

笠原遺文集

社會學類

世界風俗寫真帳 第一集

大學或問

禁秘抄釋義

東洋ニ露國ノ實際經綸
對スル

自治制大意

政黨及議院政治ノ弊

三通書(杜佑通典 鄭樵通志)

內務省
地方局譯
上海浙江
書局刊本

島田俊雄

阿部虎之助 哲理經濟學史

田尻稻次郎 經濟叢書 第一ヨリ五

和田垣謙三 財政ト金融

佐々木多門 經濟教科書

田島錦治 最近經濟論

後藤勇 シンヂケート及トラスト

河津暹 普通經濟教科書

永井直好譯 社會經濟原論

松浦鎮次郎 中等經濟要義

商業世界社 外國貿易

同 商業經濟談

同 銀行及手形

岡松三太郎 現行法規大全追錄

立作太郎 刑法改正案批評 刑法ノ私法觀

國際公法

(文敷通考)

哲理經濟學史

經濟叢書 第一ヨリ五

財政ト金融

經濟教科書

最近十年間 經濟學說
ニ於ケル

最近經濟論

シンヂケート及トラスト

普通經濟教科書

社會經濟原論

中等經濟要義

外國貿易

商業經濟談

銀行及手形

現行法規大全追錄

刑法改正案批評 刑法ノ私法觀

國際公法

戶水寬人

法律學綱領

第十九統計年鑑

日本帝國統計摘要 第十五冊

商業講話

商業講習會
編纂

歷史類

改定吏籍集覽

本扶桑略記

一代要記

愚管鈔

神明鏡

神皇正統錄

宇多天皇實錄

續世續

月のゆくへ

信濃宮傳

十津川記

底倉記

荒木田麗女

第

冊

二

第

冊

第一冊 釋皇圓

第

第三冊

應仁前記
應仁廣記
應仁後記

多々良南宗
杉岸豫八郎
文科大學

銀臺遺事
南龍公玄行錄
後太平記

第四冊

續應仁後記
南山巡狩錄
北條九代記

橋守部
齋藤幸成
落合直澄

續太平記
大日本史料 第六編ノ一
後醍醐天皇
玉露叢拔萃 寫本
稜威道別

第五冊

鎌倉九代後記
關八洲古戰錄
北條五代記

高桑駒吉
山本利喜雄
山田安榮

太古史年歷考
大鏡注釋
吾妻鏡備考

第六冊

淺井三代記
朝倉始末記
太閤記

露西亞史 歷史叢書
伏敵篇 附錄共

奧羽永慶軍記
皇年代記
續皇年代私記

第七冊

豐薩軍記
安西軍策

仰止錄

第八冊

豐薩軍記
安西軍策

仰止錄

仰止錄

第九冊

太田牛一 信長公記
西川原角左衛門
田畑吉正 川角太閤記
大江匡房 儒職家系
三善爲安 本朝神仙傳
沙彌蓮禪 日本名僧傳
藤宗友 後拾遺往生傳

棚橋一郎等 萬國大年表
大橋乙羽 藤侯實歷
藤野房次郎譯 中東戰記本末
大內暢三譯 歐洲十九世紀
高田早稻譯 英國會々史
低洛爾 萬國史
坂本健一 世界史
小島政吉等 日本歷史要義

第十冊

三善爲安 後拾遺往生傳
沙彌蓮禪 三外往生傳
藤宗友 本朝新修往生傳

後漢書注校補
三國史注證遺
五代史記纂誤補續
大平記詳解
朝鮮近世史
國史讀本
萬國讀史系譜 改史籍集覽

梯翼章

越藩史略

木村芥舟

卅年史

松平康國

英國憲法史 歷史叢書
改史籍集覽

第九冊

古今著聞集
歷代皇記
朝野群載
參考源平盛衰記 卷上

三木五百枝等
林泰輔
大森金五郎等
長谷川貞一郎等

第十冊

附 錄

萬國讀史系譜 改史籍集覽

第 十 册

藤原信實

藤某

江村專齋

三浦淨心

大道寺重祐

第廿一册 松下見林

第廿二册 大島武好

下部百太郎

スイントン

松島剛謙

菅菊太郎

橋本正志

岡山縣

古事談

今物語

塵塚物語

老人物語

備前老人物語

武功雜記

見聞集

落穂集

異稱日本傳

山城名稱志

萬國史要

世界近世史

日歐交通起源史

藤原源作傳

幕賢錄

元聖武親征錄

改史籍集覽

第 十 册

志士清談

紳書抄

耆舊得聞

介壽筆叢

烈侯問話

武藝小傳

以貴小傳

中外經緯傳

明良帶錄

恩榮錄

癡絕錄

善隣國寶記續及外記

外藩通書

豫察東北部地形圖

高知圖幅

宮崎圖幅

宿毛圖幅

同

同

同

國華萬葉記

韓半島

東游記

鈴屋大人郡日記

歐米小觀

名蹟巡錫記

耶馬溪

本朝年代人物掌覽

集古十種

史姓韻篇

好古類纂

諸國中行事大成

新古事談

地名字音轉用例

河及湖澤

史徵墨寶考證

前王廟陵記

同

同

同

須崎圖幅

大日本帝國全圖

和泉名所圖繪

金毘羅參詣名所圖繪

東海道名所圖繪

紀伊國名所圖繪

釜石圖幅

能登名蹟志

第 十 册

宇和島圖幅

江戶名所圖繪

露西亞帝國

中等東洋歷史地圖

郵便線路圖

新篇常陸圖志

東洋歷史地圖

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

附錄

百〇九

伊達千廣

大勢三轉考

山上萬次郎

新撰大地文學

平出鑑次郎

東京風俗志 中卷

農商務省

宿毛圖幅 説明書付

文科大學史志
編纂係

大日本古文書 第一卷、二卷

農商務省

宮崎圖幅 説明書付

松村操

近世先哲叢談

同

須崎圖幅 同

大西林五郎

日本歴史字典

渡邊渡

試金術 汎論

岡山縣

岡山水害史

矢田部良吉

植物學雜誌 第三号
第十四卷

續帝國文庫

常山紀談

市村塘

日本植物篇 第一編

第四門

數學類

本校製

藥用植物實驗便覽

藤澤利喜太郎

續初等代數學教科書

本校製

博物圖

澤田吾一

解柝幾何學大意

本校製

メクラヘビ、小鳥ノ頭骨

第五門

理學類

本校製

メクラヘビ、小鳥ノ頭骨
猿ノ頭骨
（八月ウナギ、エビ、硬骨魚、テウサ
メ、アホロートルノ頭骨
人類、猿ノ頭部諸筋
魚類ノ水管系統

酒井佐保

物理學教科書 中、下

本校製

メクラヘビ、小鳥ノ頭骨
猿ノ頭骨
（八月ウナギ、エビ、硬骨魚、テウサ
メ、アホロートルノ頭骨
人類、猿ノ頭部諸筋
魚類ノ水管系統

本校製

分光器圖

本校製

メクラヘビ、小鳥ノ頭骨
猿ノ頭骨
（八月ウナギ、エビ、硬骨魚、テウサ
メ、アホロートルノ頭骨
人類、猿ノ頭部諸筋
魚類ノ水管系統

高松豐吉等

北學語彙

本校製

メクラヘビ、小鳥ノ頭骨
猿ノ頭骨
（八月ウナギ、エビ、硬骨魚、テウサ
メ、アホロートルノ頭骨
人類、猿ノ頭部諸筋
魚類ノ水管系統

馬場信倫

博物學類

本校製

メクラヘビ、小鳥ノ頭骨
猿ノ頭骨
（八月ウナギ、エビ、硬骨魚、テウサ
メ、アホロートルノ頭骨
人類、猿ノ頭部諸筋
魚類ノ水管系統

第六門

氣象學

本校製

技術類

三橋四郎

陸軍陸地
測量部

本校製

本造詳細雛形集 第一輯ヨリ
第五輯

氣象學

陸軍陸地
測量部

本校製

三角測量方式草案

辨玉集

住吉物語

藤原貞幹

集古圖

鶴川龜文

華實年浪草

小杉温郵等

大日本美術圖譜

平澤平格

我おもゝろ

農商務省

編 日本帝國美術略史

正徹

徹書記物語

本 風俗畫報 卅三年、卅四年分

久保季茲

祝詞略解

第八門

文學類

赤堀又次郎

祝詞略解

芳賀彌一

國學史概論

中村秋香

落窪物語大成

森林太郎

かけくさ

織田得能

佛語解釋

加藤千蔭

うけらか花

萩野由之

譯 紫女手簡

加茂真淵

伊勢物語古意

佐々政一

新編御伽草子

北邊成章

あひひ抄

金井保三

修辭法

同

うさー抄

岡倉由三郎

日本俗語文典

同

歌袋

藤井籙

新選日本文典

野々口立圃

ふんーやうれ草紙

本居宣長

美濃の家つとをりそへ

青柳高軒

祝詞正解

木村正辭

日本文典

細井貞雄

空物結玉琴

佐々木信綱

萬葉みふくし

附 録

竹柏園集 第一編

百十一

草野清民

枕の草紙詳解 紅葉の部

悞一子批点

眞詮繡豫西游記

圖書會社

淺野和三郎譯

スケッチブック

大和田建樹

明治時代文範

衣笠宗元

世諺叢談

同

袖珍作文寶典
實用作文寶典

宇都宮的

文家小笠

作文寶典

和漢助辭通解

王充論衡

落合直澄

日本古代文學史

伊藤松雄

坪内雄藏

英文學史

清國時文類纂

戸村義保

蓬生遺稿

校訂東萊博義 下

荻生徂徠

譯文筌蹄

笹川種郎

支那文學大綱 莊子孟子韓非子

伊藤長胤

操觚字譯

同 白樂天

石川縣教育會

石川縣方言彙集

同 李笠翁

矢野文雄

齋武名士 經國美談

同 蘇東坡

第九門

辭書類

同 湯臨川

石川鴻齋

圓機活法

同 元遺山

新井君光

日本大玉篇

韓文起

高井思明

東雅 寫本

三島毅

中洲文稿 第一集 第二集

三音 字貫 四聲

落合直文

玉柴の泉

陸軍禮式

松井精

野語述説

陸海軍喇叭譜

丘瓊山

古事類苑 姓名部 文學部 武技部

軍事新報 卅三年分

故事成語考集注

教育公報 二三一號 二四二號

羽山保之

永代節用無尽藏

動物學雜誌 第十二卷

第十門

雜書類

法學教會雜誌 第十八卷

劔術教範

東京經濟雜誌 第四二卷 第四四卷

佐久間金吾

部隊教練

東京人類學雜誌 第十五卷

軍事新報部

步兵戰術 小隊中隊ノ部

東京學士會院雜誌 第廿二編

橘周太

新兵教育

哲學雜誌 第十五卷

軍事教育會

内外軍事統計

史學雜誌 第十一編

同

戰術講究錄 第一集 第二集

外交時報 第廿四卷

松石安治

戰術講授書

東洋學藝雜誌 第十七卷

陸軍士官學校

戰術上ノ決心及命令

東京物理學校雜誌 第八卷

土肥經平

本朝軍器考 寫本 補正

政教時報 同

アンダーソン 譯

室內体育

太陽 卅三年分 卅四年分

附

錄

地質學雜誌 卅三年分
卅四年分

工業雜誌 第十二卷
第十五卷

通商彙纂 百六十號
百八十一號

國書解題分類目次

彙制書目外編

刀鍬圖考

調家故事要言

世諺問答 寫本

曾我侏

爲愚痴物語

普世俗談

近古名流手蹟

漢書解題集成 二卷
三卷

太田爲三郎

日本隨筆索引

帝國圖書館和漢書分類目錄

山路一遊

讀書法

太田覃

南畝莠言

松岡玄達

簷々言

故實叢書

伊勢貞丈 貞丈雜記

本間百里 織文圖會

同 尙古鑑一覽

同 森孝安 中昔京師地圖

同 大内裡圖 中古京師内外地圖

同 考證

田宮仲宣 東瀛子

西村遠里 居行子 外編共

天野信景 しほ尻 第一編

栗田寛 栗田先生雜著

畑維龍 四方の硯

鈴木弘恭 校折たぐ柴の記

中江篤介 一年有半

福譯諭吉 本居宣長全集

福譯諭吉 福譯全集

和漢書譯書ノ部終



投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
- 一 長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せむ
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載致さざるべし

明治三十五年六月二十一日印刷
明治三十五年六月二十三日發行

編輯兼發行者

吉村政行

印刷者

生沼倍男

印刷所

商法施行
前設立
活版合資會社

石川縣金澤市早通町五十六番地

同縣同市火水町二番丁二十九番地

同縣同市高岡町三十四番地

發行所

第四高等學校校友會

